

奄美の地域メディアを俯瞰する：

歴史・印刷メディア編

—— 奄美と〈地域〉のメディア社会学：その1 ——

加 藤 晴 明

『中京大学現代社会学部紀要』 第9巻 第2号 抜 刷

2016年3月 PP. 47~128

奄美の地域メディアを俯瞰する：歴史・印刷メディア編

—— 奄美と〈地域〉のメディア社会学：その1 ——

加 藤 晴 明

はじめに（主題）

1 節 奄美とは：地域特性

- なじみの薄かった南国・奄美
- 奄美の人口と産業
- 独自の文化と自らを語る学としての「奄美学」
- 表象としての「奄美」とその多義性

2 節 メディアが沸き立つ島

- 〈メディアの総過程〉と〈表出の螺旋〉という視点
- 島語りは、島ツチュだけによるわけではない
- 奄美のメディア一覧

3 節 奄美の思い出のメディアスケープ

- 活動写真館と芝居小屋
- オリエンタル放送とミュージックサイレン
- 親子ラジオの記憶
- 軍政下の文化活動・メディア事業

4 節 奄美の新聞メディア

- 戦前からの新聞の歴史
- 奄美には全国紙・県紙も取材体制がある
- 現在の主要地元紙「南海日日新聞」

- もうひとつの地元紙「奄美新聞」
- 島の新聞の役割とは：報道だけでなく多様な社会的役割

5 節 奄美の雑誌メディア

- 過去の雑誌：『サンデー奄美』・『奄美グラフ』その他
- 草分け的フリーペーパー『奄美探検図』
- フリーペーパー『夢島』
- フリーペーパー『まち色マガジン』
- 奄美の情熱情報誌『ホライズン』

6 節 奄美の出版メディア

- 永井竜一と白塔社（赤羽王郎）
- 藤井勇夫と道の島社
- 作井満と海風社
- 向原祥隆と南方新社

7 節 小括

- 再び、地域（奄美）に準拠したメディア社会学の必要性について
- 4つの“発見”

（続編の予定）

■奄美の地域メディアを俯瞰する：放送・ネット編

—— 奄美と〈地域〉のメディア社会学：その2 ——

- 1 節 テレビ放送メディア時代の奄美の地域メディア
- 2 節 奄美のラジオ局
- 3 節 奄美のネット状況
- 4 節 通信インフラ
- 5 節 奄美メディアの俯瞰図からの示唆

■奄美の地域メディアを俯瞰する：〈総過程論〉と〈表出の螺旋モデル〉

—— 奄美と〈地域〉のメディア社会学：その3 ——

はじめに（主題）

奄美大島を訪れた者は、南海の離島に日刊新聞、ケーブルテレビ、コミュニティFMが複数あり、そして幾つものタウン誌が山積みになっていることに驚く。さらには、空港の売店はじめ島内の多くの土産物店で、奄美に関わる書籍や音楽CD、そして映像DVDが数多く販売されていることに目が行く。小さな離島と思ってやってきた来島者にとって、それは不思議な景観である。奄美は単なる離島ではなく、何か特別な島なのだろうかと思わせってしまう。

多くの日本人にとって、奄美は沖縄と区別がつきにくい。南の碧い海、亜熱帯の原生林、鳥唄、郷土料理、独特の言語などは沖縄イメージと重なる。人口140万人を抱える沖縄ほどのスケールではないが、沖縄の十分の一以下の人口の奄美に、幾つものメディアがあり、さまざまなメディア商品（新聞・書籍・音楽CD・DVDなど）が販売されていることは、やはり“何か”特別なものを感じさせる景観なのである。南の海にあこがれて来た予備知識の少ない観光客ならば、さおさら鹿児島県の一つの離島なのに、「なぜ？」と思ってしまうかもしれない。

メディアがたくさんあるということは、島内での情報の流れが活発であり、また島から外に向けての情報発信の盛んな島ということでもある。もっとひらたくいえば、それだけ奄美は島を語るメディアという文化装置に溢れた島ということもできるし、島を語る人びと、語りたい人びとがたくさんいる島ということになる。島語りメディアに満ちた島、それが奄美である。^(註1)

奄美大島や奄美群島（鹿児島県大島郡）は、多くの島がそうであるように、交通の出入り口が空路・航路に限られているという意味で、また複数の島にまたがる自治体がない（小さな離島を抱える瀬戸内町だけは例外）という意味では、地理的・制度的な境界がはっきりしている。では、こうした地理的・制度的輪郭が鮮明な地域のなかでは、いかほどのメディア

が存在しているのだろうか。奄美におけるメディアの総配置とはどのようなものであり、誰によってどのように営まれ、どのような情報の流れを形成しているのだろうか。誰が、誰に向かって、何を語っているのだろうか。それがこの論考の素朴な主題である。

そもそもあるエリアの中で、人びとはどのような情報メディアと接して暮らしているのだろうか。そこには、いかなるメディアが積層されているのだろうか。こうした「あるエリア内の全てのメディアを俯瞰する」という主題を設定するのは、従来の地域メディアの研究ではそうした研究が皆無に近いと考えてきたからである。確かに、地域メディア研究といわれる学問領域はある。それは、マス・メディアへの対抗メディアとして地域メディアという固有のメディアを想定し、その理想の事例を発掘し紹介するような試みに終始してきた傾向がある。

地域メディアの類型づくりや理想モデル探しだけではなく、もう少し“地域の”メディアと素朴に向かい合う試み、そしてそれが誰によって担われどのような考えで実践されたのかという意味では、人（担い手・情報消費者）や社会変容との関わりも視野に入れた社会へのひろがりをもった研究（＝社会学的研究）の試みがあってもよいのではないのか。本稿で、地域メディアよりも、「地域のメディア」、あるいは「地域のメディア社会学」という言い方を多用するのもそうした関心からである。^(註2)

繰り返すが、ある“特定の地域”の中にあるメディア事業を全て発見し、それがどのように配置され、どのようなコミュニケーションつまり情報の流れや送り手と受け手の関係を形成しているのだろうかというのが、「地域のメディア社会学」の主題である。この、地域のなかにあるメディア事業の全域を、〈地域メディアの総過程〉という言い方で表現しておこう。そして、メディア溢れる奄美における〈地域メディアの総過程〉を、できるだけ過去にも遡りながら網羅的に描いてみよう。

つまり、本稿では、特定の地域としての奄美に焦点をあてることで、ひとつの地域のなかにある全てのメディア事業の総配置図や、その事業の特

徴や事業の考え方に分け入るような〈地域メディアの総過程〉の研究を試みる。この試みには、単に奄美の研究ということだけを意図するのではなく、狭義の地域メディア論を超えて、地域メディア論を理論的に拡張するという狙いが込められている。

1 節 奄美とは：地域特性

●なじみの薄かった南国・奄美

奄美は、多くの日本人にとって馴染みのある島とはいえない。最近ではメディアへの露出が増えてきているとはいえ、群島内最大の奄美大島でさえも、伊豆大島と混同されたり、沖縄の一部と思われたりもする。沖縄本島や石垣島・宮古島などに比べればメディア露出は多いとはいえ、観光客も格段に少ない。日本国内の人びとに蓄積されている“沖縄イメージ”にくらべれば、奄美がいかなる島であるかの説明を迫られるような“イメージしにくい”、知られていない島なのである。

奄美が全国的なマス・メディアの報道のなかで登場するのは、何よりも台風の通り道として気象ニュースのなかである。その際には沖縄と同類の南西諸島の台風情報・気象情報という文脈のなかで取り扱われる。

あるいは、昭和初期生まれの年配者は、かつて隆盛を誇った大島紬の産地として知っているかもしれない。または昭和37年にヒットした歌謡曲「島育ち」や「島のブルース」の舞台としてなにかの馴染みがある島かもしれない。しかし、映画「島育ち」のヒロイン（岩下志麻主演）は奄美ではなく琉球風の髪型であった。奄美はこのように伊豆大島と混同されたり、さらに文化的には沖縄と同型とみなされてきた島なのである。

小説に詳しい人なら、ヤポネシアという語を使って独自の南方文化論を展開した小説家の島尾敏雄ゆかりの島として、絵画に詳しい人なら、日本のゴーギャンになぞらえられる孤高の画家田中一村の終焉の地として奄美

をイメージできるかもしれない。しかし、島尾や田中の名前は、近年増えつつある観光目的の来島者にはほとんど知られてはいない。

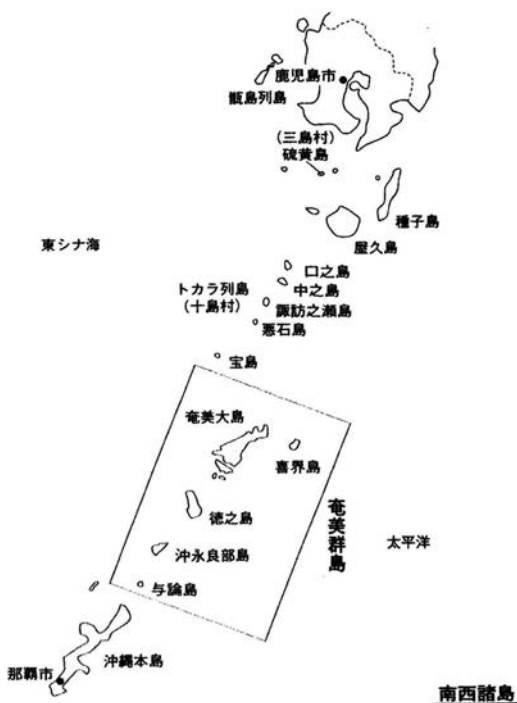
奄美群島最大の島である奄美大島は鹿児島から 380 km、那覇からは 330 km あまり離れた南海の海に浮かぶ離島である。伊豆大島ではなく、沖縄県でもなく、鹿児島県の離島であると知っている者でも、そこに行く交通路を具体的に知っている人は少ないだろう。

ちなみに、空路の場合には、奄美空港へは東京(羽田)、成田、大阪(伊丹)、福岡からは直行便が飛んでいる。航路は、大阪・神戸～沖縄間のフェリーか、鹿児島～沖縄間のフェリー利用となる。鹿児島県に属するため鹿児島市との飛行機便、船便の利便が高いのだが、就職・進学先としては、関西、東京、東海などに向かうことが多い。世代を問わず、東京など内地に行くことは「のぼる」(反対の表現は「島に帰る」)という表現が普通に使われる。

100 年以上の歴史がある出身者の同郷の会である郷友会も、東京・関西に大きな会があり、東京・関西とのつながりは深い。つまり、鹿児島県の離島として孤立した島というわけではなく、鹿児島を通さないで東京・大阪・名古屋などの大都市と直接繋がるネットワーク回路をもつ島でもある。

奄美群島は、沖縄が日本に返還される 1972 年までは、日本の最南端の島々であり、文字通り「南国」であった。群島最南端の「与論島」は、かつて若者に南の楽園ブームを巻き起こしたことがあり、団塊の世代には少し知られた島である。鹿児島や宮崎でもそうだが、奄美ではいまでも「南国」を戴く商号を見かける。海外旅行が一般化する前までは、「南国」は、新婚旅行の対象となるほど日本人にとってエキゾチックな記号としての力をもっていたのである。

図 1：奄美群島の地図



（出所：神谷裕司（1997）『奄美もっと知りたい』南方新社より）

●奄美の人口と産業

奄美群島は、有人8島・無人島6島からなっている。かつては奄美諸島の表記も使われたが、正式名称は奄美群島である。九州と台湾の間の島々を表す表記が南西諸島。種子島から与論島までが薩南諸島。薩南諸島のうち、奄美大島から与論島までの島々が奄美群島である。最大の島は、奄美大島であり、面積が712km²で佐渡島（855km²）に次ぐ大きさの島である。沖縄島（1208km²）の約6割の面積の島といったほうがわかりやすい。群島の中核都市域は、奄美市名瀬である。奄美市名瀬は、2006年に笠利町・住用村と合併して奄美市となるまでは名瀬市であった。

人口は、群島を合わせて約 10 万人 (2013 年)。日本復帰数年前の 1949 年 (昭和 24 年) が人口のピークで 226,752 人である。近年では毎年 1500 人ほど減少しつづけている。奄美大島だけでは、約 6 万人。そのなかで最大の人口密集地域の旧名瀬市に 3.7 万人と約 6 割以上が都市部集住する構成になっている。人口密度だけを見れば、沖縄本島の 10 分の 1 程度である。沖縄を旅したことのある人なら、沖縄の離島に印象が近いであろうか。

奄美は日本の他の地域同様、人口の急速な減少にみまわれ、2005 年から 2010 年間で 7,710 人が減少している。群島全体で毎年 1,500 人程度が減少していることになる。つまり毎年小さな村一つが消滅している計算になる。

1955 年から 2010 年にいたる 55 年間での人口減少率をみると、とりわけ奄美大島の西部・南部の大和村・宇検村・瀬戸内町の人口減少率が 6 割りを超え、宇検村では 7 割近くに達している。

鹿児島県の人口が 168 万人であるから、県の中での人口の割合は約 17 分の 1。この鹿児島県の小さな一部という規模は、奄美を考える起点でもある。(逆にいえば、それは、この小さな島々に薩摩文化と異なる“奄美”という独自の豊かな文化的蓄積があることの驚きにつながってくる。)

産業は、島によってもかなり違いがあるが、かつては大島紬で有名な紬産業が主産業であった。現在は、黒糖焼酎、サトウキビ農業、畜産 (肉用小牛生産) である。それに、南国系果物 (たんかん・パッションフルーツ・マンゴーなど)、じゃがいも、花といった農産物、そして近年ますます期待が高まりつつある観光が産業の裾野を構成している。また、かつては航路の重要な中継地であったこともあり、名瀬・古仁屋には飲食業も多い。

かつて奄美の代表的な産業であった大島紬の起源は、約 1300 年前まで遡るといわれているが、技術革新が進んだのは明治になってからである。大正末期が大島紬の最盛期といわれている。戦争を挟んで、日本に復帰した 1953 年 (昭和 28 年) 以降に再び活況となり、日本経済の高度成長期には高級な着物として大きな需要があった。

奄美群島最大の歓楽街である屋仁川（やにがわ）通りでは、景気の良い紬関係者がビールで下駄で汚れた足を洗ったという話が伝説として残っている。生産のピークはオイルショック直前の1972年（昭和47年）で、それ以降、とりわけ1985年以降は急速な減産となってきた。奄美大島で1975年に200万反あった生産は、2011年には8千反未満（生産額で6億円余り）にまで落ち込んでいる。群島経済への大きな打撃が推察できる。

紬に次ぐ基幹産業として期待されてきたのが黒糖焼酎である。奄美群島にのみ許可されたサトウキビを原材料とする蒸留酒である黒糖焼酎は、1975年の移出額14億に比べて2010年には78億円近くに伸びているが、これも焼酎ブームが過ぎた2006年以降は減少に転じている。

成田空港からのLCCの就航により近年観光客が急増しており観光への期待は高い。奄美ではいま世界自然遺産登録への期待の機運が高まっているが、それは滞在型、体験型、個人型の観光への期待でもある。

表1：奄美群島の人口（2012.10.01／鹿児島県）

島	自治体	人口	島人口
奄美大島	奄美市	44,544	63,377
	龍郷町	5,975	
	大和村	1,630	
	宇検村	1,873	
加計呂麻島	瀬戸内町	9,355	
請島			
与路島			
喜界島	喜界町	7,632	7,632
徳之島	徳之島町	11,632	24,582
	天城町	6,346	
	伊仙町	6,604	
沖永良部島	和泊町	6,919	13,395
	知名町	6,476	
与論島	与論町	5,278	5,278
	合計	104,786	104,786

●独自の文化と、自らを語る学としての「奄美学」

奄美は、鹿児島県ではあるが、鹿児島とは大きく異なる独特の民俗文化をもっている。もちろん、鹿児島・本土から移入されたと思われる文化もある。他方で三線をはじめ琉球文化の影響を強く受けているが、かといって琉球と同じというわけではない。今日でも、“内地”という言葉は、北海道・沖縄・奄美では使われる。しかしヤマトとして表象される内地日本に対する親近感・距離感のようなものも、沖縄とは異なる。それは日の丸・自衛隊に対する親近感・距離感でもある。

言語は、最近では奄美語といわれるが、これは、言語学的には奄美沖縄方言圏＝北琉球語圏（その中の奄美語・国頭語）という視点でとらえられている。基本的には、薩摩よりは琉球に近いものでありながら、奄美固有の“地”の唄や踊り、“地”の食の文化があるといってもよいだろう。沖縄の場合でも、本島と八重山や宮古（南琉球語圏）ではかなり異なることを考えれば、奄美と沖縄に差異があるのも当然であろう。

奄美のイメージは、沖縄ほどには一般化していないことから、奄美を知らない人に奄美の自然・風土の情景を魅力的に語り伝えことはなかなか難しい。鹿児島県の一部ではあるが、他にも多くの離島を抱える鹿児島県のなかで、奄美に旅行に行く鹿児島県の人びとが多いというわけではない。琉球文化圏といわれるが、沖縄の人びとにとって奄美は関心外であることの方が多い。ある沖縄の地域文化に関心をもつコミュニティ放送関係者からさえ、「奄美にあるものは、全部沖縄にあるから、わざわざ行く必要がない」、そんな言葉が語られるのを聞いたことがある。沖縄の田舎の一部としての奄美、それは沖縄の人々の普通感覚でもあるだろう。琉球の都であった那覇（あるいは首里）からみれば、奄美はかつて首里王朝に征服統治された数ある離島の一つに過ぎない。

ただ、この南海の小さな群島の独特の文化は、研究者を虜にする魅力があるようである。奄美民謡研究の第一人者である小川学夫は、1961年（昭和36年）に東京で開催された全国民俗芸能大会で奄美の民謡を聴いた際

の経験を、後に次のように記している。

『奄美大島の民謡と八月踊り』の舞台だけが、今も昨日のことのよう
に思い出される。私にとっては単なる感動というより、こんな音楽が
この日本にあったのかというショックにも似た感動であった。
(小川学夫、1984:12)

奄美は、「日本の最南端」という地位は沖縄の八重山諸島に譲り渡したが、その濃厚な民俗文化の残滓において、そしてそうした民俗文化の現代的な継承（それは大会というメディアイベント・レコード化・習いごと化などを通じたメディア媒介的な継承と創生である。加藤清明・寺岡伸悟、2012）において、今日の日本のなかでも最も異色で魅力に富む地域であろう。

そうした奄美は、沖縄の研究とは量的に比べようもないが、実に多くの郷土・地域研究を生み出してきた島である。戦後まもなく結成された学術団体の連合体であった九学会連合会は、日本の各地で日本の風土の特性や均質化の過程をめぐって自然・文化・社会の総合研究を実施してきた。前期には離島などの特定地域、後期には、テーマ別の全国規模調査が試みられた。それらは、高度成長のなかで日本の国土の端々がどのように近代化・工業化・都市化していくのかを扱った一連の調査である。対馬（1954）、能登（1955）、奄美（1958）、佐渡（1964）、下北（1967）、利根川（1971）、沖縄（1976）、奄美（1979）、風土（1985）、日本の沿岸文化（1989）、地域文化の均質化（1994）。その中でも奄美は二度にわたって調査対象地となっている。（※九学会連合とは、人類学、民族学、民俗学、考古学、社会学、言語学、心理学、宗教学、地理学の専門を異にする学者が集まって、共通のテーマをたて、フィールドワークの研究をする学術団体。1947年に六学会で発足し、1989年に解散。1994年に最終報告書を出版している。）

奄美だけが二度も調査地に選ばれたのは、日本の基層文化と南方文化の相関関係を明らかにするためだったと言われている。九学会連合奄美大島研究調査委員会による調査は、1955年から58年と、1975年から1979年の2回である。報告書は、1982年に『奄美：自然・文化・社会』（弘文堂）と題した大部な報告書として出版されている。こうした九学会連合の奄美調査（とりわけ第1次調査）は、地元の在野の郷土研究者たちの研究に刺激を与えたと言われている。奄美に移り住んだ作家の島尾敏雄は、「例の「九学会連合奄美大島共同調査委員会」による島外からの調査は、昭和三十年以来実施され、島内の研究者に大きな刺激を与えましたが…」(島尾、1976、552頁)と記している。九学会の成果については島尾のエッセイ集『名瀬だより』（1977）のなかでも何か所か散見され、調査の成果を認識していたことが伺える。

九学会の奄美研究のもうひとつ産物は、第1次の奄美調査に同行した民俗写真家芳賀日出男（芳賀は、慶応大学在学中に民俗学者の折口信夫に出会い影響を受けている）の残した1万枚を超える記録写真である。1955年7月から1957年9月までの間のこの記録は、『奄美の島々』（1956年）として出版されている。

芳賀は、2011年に「1955-1957 自然と文化 奄美」と題した写真展を開催している。その説明文には、奄美に“はまる”人々（観光客であったり、Iターン者であったり、研究者であったりするが）を惹きつける、奄美の魅力が端的に記されている。

漁や稲作、ユタ（巫女）とノロ（祝女）制度、住居、冠婚葬祭、地形など細やかに調査は進められ、撮られた写真は時代や地域の色を強く映しだしたものでした。九州の南端から南方に伸びた奄美諸島は、本土から切り離された歴史や琉球王の統治下にあった過去もさることながら、亜熱帯の気候に属し、台風が多発する地域であり、

地理的・自然的条件があまりに本土と異なるため、奄美独自の文化を築いていました。近年では消失してしまった、年中行事や宗教文化・儀礼が多々あり、血縁者だけではなく、島全体での深い繋がりを意識せざるをえません。謙虚に自然と向き合い、季節ごとに神を祀り、祖先を崇めるといふ、濃密に季節と調和して暮らす日本人の姿を垣間見ることができます。民俗学の視点で捉えた芳賀氏の「奄美」は、人々が何を心の拠り所としていたのか、生活の何処に重きを置いていたのか、都市化と近代化によって失われつつある日本の習俗・文化の源流の意味を捉えています。（写真展・説明文より）

人口が20万人から10万人に激減してきた離島において、奄美の郷土研究者自身によって、また奄美に関心をもった人びとによって「奄美学」と呼ばれる学の地帯が拓かれてきたことも注目し得る。九学会連合の調査が始まった翌年には、地元の奄美研究者である文英吉らと1955年に奄美に移り住んだ作家島尾敏雄によって奄美史談会が結成された。史談会は1958年には奄美郷土研究会へと継承されている。

そして、地方文化の復権が叫ばれた70年代には、南海日日新聞社と鹿児島大学が共催して、「奄美学」の起点ともいふべき記念碑的なシンポジウム「奄美学に関するシンポジウム」が開催された（1974.9.23）。シンポジウムの冒頭で、民俗研究家の山下欣一は、「奄美学の確立のために」と題した問題提起をおこなった。「奄美学」とは、「島人による島の認識」学であり、そこには「奄美の人が奄美を認識し自己を規定していく奄美学を確立する時期にきている」というメッセージがあった。こうした自己認識の学は、その後山下欣一の鹿児島国際大学退職を機に『奄美学 その地帯と彼方』（2005）に結実している。

奄美の自己認識は、奄美出身者だけではなく、縁あって奄美に移り住んだ人々を虜にしてきたことも興味深い。古くは江戸時代に薩摩の上級武士

であった名越左源太が、1850年から55年の奄美に島流しにあった間に記した民族誌『南島雑話』は、今日でも昔の奄美の風土を知る重要な資料となっている。

江戸時代の名越以来、奄美は島出身者だけではなく、仕事で島に来たりして島と関わりもった教育者・知識人・研究者の関心をも惹きつけてきた。奄美出身か否かに関わらず、奄美に何年か居住した学校の教諭・新聞記者、在野の人びとによっても、奄美の自然・文化・社会に関する著作は次々に出版されてきたのである。

こうした研究言説もひとつの奄美の“島語り”というなら、実に多くの島語りが産み出されてきたといえる。島唄本も、楽譜も、音楽研究とは門外漢の島の唄関係者によってまとめられてきた。繰り返すが、島の規模を考えれば、これは驚くべきことである。奄美は、島語り人を生み出す島、寓話から学問まで島語りを紡ぎ出す島でもあるようだ。

表 2：奄美研究の主要著作の例

著 者	発行年	著 作 名	出 版 社
坂口徳太郎	1921	奄美大島史	三州堂書店
昇 曙夢	1949	大奄美史	奄美社
文 英吉	1957	奄美大島物語	南島社
村山家國	1971	奄美復帰史	南海日日新聞社
恵原義盛	1973	奄美生活誌	木耳社
島尾敏雄編	1976	奄美の文化 - 総合的研究 -	法政大学出版局
九学会連合奄美調査委員会	1982	奄美 - 自然・文化・社会 -	弘文堂
山下欣一・南海日日新聞社	1993	奄美学の水脈	海風社
西村富明	1993	奄美群島の近現代史	海風社
南海日日新聞社編	2001	それぞれの奄美論	南方新社
間 弘志	2003	全記録	南方新社
松本泰丈・田畑千秋	2004	奄美 復帰 50 年	弘文堂

著者	発行年	著作名	出版社
鹿児島地方自治研究所編	2005	奄美戦後史	南方新社
「奄美学」刊行委員会編	2006	奄美学 その地平と彼方	南方新社
喜山荘一	2009	奄美自立論	南方新社
須山 聡	2014	奄美大島の地域性	海青社

※奄美に関する著作は民俗学領域でかなりの蓄積があるが、このリストは、あまりジャンルにとらわれず比較的総合的ともいえる奄美に関する代表的な書籍を列挙している。島唄関係は別途作表したい。また、山下欣一・南海日日新聞社が編集した『奄美学の水脈』には、120冊に及び文献の解題が紹介されている。また奄美研究の文献リスト本も出されている。

●表象としての「奄美」とその多義性

ちなみに奄美という言葉はかなりやっかいな言葉である。沖縄のように統一した領主や国王をもたなかった奄美群島では、“奄美”という言葉は、外との関係のなかでは奄美群島全域を指す言葉として使われつつ、奄美群島の内部では島々を統合するような総称となりにくいからである。奄美は、ある種、抽象的で象徴的なカテゴリーのような言葉としてある。もっと露骨に言えば、奄美というひとつの実体はない。そうした複雑さにこだわって、総称としての奄美をあえて「奄美」と括弧付きで記述する研究者もいる。

奄美は、ある明確な輪郭をもった固形としての“地域”の名称ではない。複数の奄美があるといったほうがよい。それと同時に、奄美という言葉は、ひとつの奄美を仮構する「表象」である。その意味では、奄美はイメージとしての奄美共同体を表す言葉でもある。奄美は、このように奄美群島の“総称”・“俗称”であり、想像の共同体という意味では“仮象”・“表象”である。

また、沖縄島（沖縄本島）はあるが、奄美島や奄美本島という島はない。行政的名称も、鹿児島県大島郡であり奄美郡ではない。平成の大合併で

2006年に奄美市が誕生したために、「奄美＝奄美市」というイメージが強くなったが、それまでは「奄美」は、群島内では、奄美群島や奄美大島といった呼称のなかで使われていた。現在でも、喜界島や徳之島・沖永良部島・与論島など奄美大島以外の島にいくと、“あまみ”という発話を聞く機会は極端に少なくなり、「大島」という言葉の方を耳にする。

奄美大島以外の島からみれば、奄美は、奄美大島だけの範囲を指す意味で使われ、しかも、大島郡の支庁があるにしても、意識の面では序列としての“本島”という位置づけではないのである。とりわけ、徳之島のような規模の大きな島の場合には、奄美大島との対抗意識からも、島内で“あまみ”という言葉よりも徳之島という発話を耳にすることが多い。地域を指示するリアリティが、自分の島にあるからであろう。

このように喜界島や徳之島からみれば、通常奄美といった場合には、奄美大島とその周辺の島々を指すことが多い。つまり、「徳之島は徳之島」であり、「喜界島は喜界島」であり、それぞれの島の名前が表に出て、“あまみ”という言葉は背景のようになってしまう。沖永良部島や与論島なら、沖縄（国頭）への距離感の近さからも、なおさら“あまみ”は遠い。

そもそも「奄美」という言葉が一般に使われ出したのは、明治になり海軍が地図を作りだしてからだという説や、奄美群島広域事務組合がさかんに“あまみ”という語を表に出すようになったからだという説など曖昧なところがある。ただ、群島外では奄美出身者の郷友会である「奄美会」に典型的に表されているように、奄美群島や出身者の総称として普通に使われてきた。奄美は、外部との境界を表す語彙として使われてきたのである。「奄美出身」、「奄美に行く」、「奄美に帰る」などの用法は、そうした境界に準拠した使われ方である。このように「奄美」という言葉を使っても、その輪郭や指示対象は、使う人の立場やアイデンティティの準拠点によって微妙に異なってくるには留意しておく必要がある。

このように「奄美」は、ひとつの表象であり、奄美群島や奄美の人々、あるいは奄美出身者の“総称”である。もちろん、情報コミュニケーション

ンが多層になってきている今日では、奄美に限らず“地域”というものを、ある明確な輪郭をもつ実体として設定することが揺らいでいる。かつて地域の近隣関係を意味していたコミュニティという語彙を、ネット社会の関係とつながりを表す語彙として受け止めることが自然だと感じる世代も増えてきている。社会移動やコミュニケーションが多層的・多層的になってきている今日では、「地域」そのものがなにか所与の自明のものとしてあると想定することが難しい事態が生まれている。

「○○地域」なるものは、確かにある地理的な範囲として描くことができる一方、それは「地域外」との関係のなかで定義されたり、ひとつひとつの表象であったり、ひとつの意味域として成立したりする。そしてなによりもやっかいなのは、社会移動やネット社会の深化によって、アイデンティティの準拠点としての“場所”の意味が揺らぐときに、「○○地域」なるものは、それぞれの人々の人生のなかで、選択的にある一定の期間、限定的にかかわる場所にさえなっている。近年の、統一地方選挙の得票率の低下は、地域のリアリティの揺らぎのひとつの反映でもあろう。（別論考で、地域を〈自己コンテクスト性〉の視点からとらえたのもそれゆえである。加藤清明、2015a）

そうした中で、おそらく、奄美は、日本のなかでも、伝統的な意味での地域というものの素朴なリアリティがもっとも強く残る地域であろう。だが、その奄美でさえも、「奄美」「あまみ」という言葉は、多層な意味内容で使われる。沖縄同様、奄美出身者には、奄美2世、奄美3世という言い方が使われることもある。奄美の人々のなかでは、「あの歌手は歌がうまいでしょう。奄美2世だからよ。」そんな会話が自然に出てくる。地域としての「奄美」はひとつの集合的カテゴリーであるから、多層な意味内容をもつのは当然といえば当然ではある。

極端な言い方をすれば、奄美というカテゴリーは、実態としての地域というよりも、文化的な同質性や地域のまとまり、アイデンティティを表象する概念でもある。2014年11月17日から、離島初のご当地ナンバーで

ある「奄美ナンバー」がスタートした。これも、奄美アイデンティティのシンボルが奄美ナンバーに結実しているとみなすことができる。奄美ナンバーは、明らかにひとつの奄美を仮構する強力な地域表象である。

奄美の人びとが“あまみ”と発話した時に想起する地域としての奄美は、シマ、島、群島と三層ある。群島の中心都市部である“名瀬のまなざし”からみると奄美という言い方で群島全域を指示することが多いが、他の島では、それは大島のことである。

ただ一般には、「奄美では・・・」と素朴に使われる場合、アイランドとしての島ではなく、シマ（集落・自然村）、つまりコミュニティのレベルの生活世界を指して使われることの方が多い。奄美の民俗、奄美の風土、奄美の文化、などと使われる場合、奄美のシマの生活を指している。それくらい、シマのリアリティが強固だったということであろう。

表 3：三層の「奄美」

表象	領域	リアリティをもつ指示対象
奄美(あまみ)	シマ	生まれジマ、集落
	奄美大島	奄美大島とその周辺の島々（加計呂麻島・与路島・請島）
	奄美群島	奄美大島・喜界島・徳之島・沖永良部島・与論島

奄美の“地”の言葉は、最近でこそ奄美語・国頭語という言い方をされるが、その言葉もシマ（集落）によってかなり異なるという。例えば龍郷町戸口地区のシマグチをさして、戸口言葉という言い方をしたりする。

奄美という語の多義性を意識する場合、とりわけ制度的に群島全域を表す場合には、あえて「群島」という語彙をいれることにもなる。「奄美群島観光物産協会」「奄美群島広域事務組合」「奄美群島振興開発特別措置法」などはその典型であろう。民間の場合でも、「奄美群島しーまブログ」のような使いかたをする。

結局「○○」という「地域」というものは、誰が、誰に向かって表象しようとするかで、その地域カテゴリーがもつ指示対象となる範囲が異なる。地域は制度上の実体的なカテゴリーでもあるが、認知上のカテゴリーでもあるのである。

本稿では、基本的には奄美大島を中心とした議論となるが、いちいち奄美大島と断らずに、奄美という総称を使っていくことにする。

2 節 メディアが沸き立つ島

●〈メディアの総過程〉と〈表出の螺旋〉という視点

奄美はメディアが沸き立つ島である。こう書くとあまりに表層的すぎるかもしれないが、すでに指摘したように奄美を初めて訪れる人はその多様なメディアの存在に驚く。奄美を代表する民俗学者であった山下欣一は、「奄美の人が奄美を認識し自己を規定していく」学問としての「奄美学」を提起していたが、奄美を発信し、自己を表現する媒体の裾野はひろい。学問的な著作や思想媒体が『奄美学』として屹立する一方で、より平易で多様な生活密着型のメディアも次々に展開されてきた。

思想空間からメディア空間までの多層なひろがりのなかで、つまり物語性が高いものから日々の生活情報のレベルまでのひろがりのなかで奄美は語られてきたのである。くり返すが奄美という人口10万人余りの小さな群島（面積は決して小さいとはいえない）に、実にたくさんのメディアがあり、島々をめぐる自己語りが盛んだ。さらに島内だけでなく、島外にも奄美を語るメディアがある。

そしてそうした多様なメディアが相互に参照しあいながら、さらなる語りを相乗的に産み出していく。メディアが奄美の文化を表現するという単純な話だけではない。その奄美文化自体が、かつての民俗文化として描かれた固形物としてあるのではなく、次々に登場する奄美のメディアによっ

て変容され、再生され、相互に参照し合いながら現代的な形で創生されていく。例えばステージ化によって高音化・低速化・叙情歌してきたといわれる奄美島唄の変遷などを想起すればわかりやすい。

地域には、高尚文化から大衆風俗文化までを守備範囲とする多様なメディアが沸き立つ。そうした様相を捉えるには〈地球メディアの総過程〉という視点が必要である。そしてそのメディア同士が相互作用し、新しい文化の様相を作り出す。それと同様に、文化とメディアも相互作用しつつ変成していくという意味では両者は再帰的な関係（互いが互いに準拠しあうような関係）となる。そうした相互浸透的・再帰的・相互準拠的で生成的なプロセスを、加藤・寺岡は、〈表出の螺旋〉と表現してきた（加藤晴明・寺岡伸悟、2010）。地域における〈地域メディアの総過程〉は、この〈表出の螺旋〉のプロセスをへながら裾野を拡大していくのである。

そうした地域における〈地域メディアの総過程〉と〈表出の螺旋〉という視点から奄美を見渡す時、奄美にはこんなにもとも思えるほどに、多くのメディア事業があり、それぞれのメディアのなかで「奄美とは」と語りつづけている。それは、地域メディアとしてCATVやコミュニティFMしか知らなかった者には驚異的で魅力的な景観である。いったい奄美にはどんなメディアがあり、それは誰が、誰にむかって、どのような考え方もとづいて、どのような情報を集め編集し発行、出版、放送、発信しているのか。

こうした問いからは、さらに考えねばならない4つのサブテーマがひろがる。

- ①メディアの総過程：たくさんのメディアがある。
- ②メディアの担い手：メディア事業を担う人がいて、その営みを支える考え方がある。
- ③メディアのベクトル：誰に向かって、どのような情報を発信しているのか。
- ④メディア相互の〈表出の螺旋〉的關係：メディア同士、そして文化と

メディアの相互浸透的な関係がある。

確かに、県域としての地域にはたくさんのメディアがある。あるいは、県庁所在地から遠方の比較的独立した経済圏を形成している地域には日刊紙も含めてさまざまなメディアが成立しやすい。とりわけ沖縄には、沖縄を語り発信するたくさんのメディアが存在する。沖縄も奄美は、自らの存在を語るメディアを必要とする地域だからだ。だからこそ、〈地域メディアの総過程〉や〈表出の螺旋〉の視点が必要なのである。

●島語りは、島ツチュだけによるわけではない

前述したように、そうした島語りは、島人（島ツチュ）だけによってなされてきたわけではない。奄美に赴任したり、奄美とかかわった者は、奄美について語りたくなるようだ。たまたま縁があって奄美に赴任したり棲み着いた人が、島語りの本を書いたりする。そうした著作も多い。奄美語りは、奄美と深いコンテクスト（意味的な関与）をもった人々によって産み出されてきたのだ。

たとえば、古くは大正時代に奄美の郷土史に関する名著『奄美大島史』をまとめた大島中学校地歴科の教諭（著書発行時は鹿児島県第一師範高等学校教諭に転任）の坂口徳太郎は、愛媛県出身である。1917年の5月に大島に着任し、奄美大島の郷土史研究の必要を強く感じた坂口は、急遽奄美を研究し、なんと翌年の18年の8月には大著を脱稿し、第1次世界大戦後の混乱が収まりつつある1920年に鹿児島島の書店から出版している。

また、『名瀬だより』を書いた島尾敏雄もそうだが、現代奄美の紹介本として知られている『奄美、もっと知りたい』（1997、南方新社）を書いた神谷裕司も島外者である。神谷は、朝日新聞の記者として94年から97年まで奄美に赴任して奄美の記事を書き続けている。『奄美まるごと小百科』（2003）を執筆した蔵満逸司は、奄美に赴任した教員の息子であり、また後に自らも奄美の小学校の教員に赴任した時にこの優れた奄美紹介の本をまとめている。

このように、メディアによる奄美語りは、奄美出身者にかぎられるのではない。教師などで奄美に赴任したり、赴任した教師の子息だったり、あるいは何かの出来事を契機に奄美に関心をもつ人びとによっても語られる。その意味では奄美は、奄美を郷土とする人々の自己語りに満ちた島でもあるとともに、“鳥ツチュ”以外の者にとっても、魅了された島を語りたくなる島なのである。奄美のある高名な知識人の先生が、「奄美には先生が多い」と笑っておられた。自然も文化も、語りたくなる固有の魅力に溢れているのだろう。

●奄美のメディア一覧

奄美の地域メディアには、どのようなものがあるのだろうか。地域のメディアをめぐることは、「地域メディア」という研究領域があり、そこでは地域メディアは、非マスコミとして位置づけられてきた。しかし、奄美を例にとればすぐにわかるのだが、地域のなかには、全国メディアも入り込んでいる。テレビは、全国メディアを受容している。地域内には、全国メディアの駐在員もいる。また地域の新聞は、マス・メディアとして全国ニュースと地元ニュースを組み合わせる紙面を構成している。つまり、**〈地域メディアの総過程〉**を考える場合には、地域メディアという固有のメディア種が重要なのではなく、地域内のメディアという視点が重要なのである(加藤晴明、2015a,b,c)。

〈地域メディアの総過程〉には、紙メディアからネットメディアまでの範囲が考えられよう。また、それぞれのメディアは歴史的な経緯のなかで拡張し変遷してきている。また、メディアのコンテンツに視点を移せば、そこでは天気予報や交通情報のような日常的な生活情報を通じての島の情報発信もあれば、「奄美とは何か？」を問うような記事・番組・著作といった直接的な島語りもある。

また情報発信＝島語りのメディアといっても、島内の人々に向けて発信される情報メディアもあれば、観光客向け、島外向けの媒体もある。時に

それらは二分されるのではなく、内と外をつなぐメディアであったり、また外向けと内向けが重なり合ったりもしている。

表4：奄美のメディア一覧

ジャンル	種類	事業名
活字系	新聞	南海日日新聞、奄美新聞（旧大島新聞）朝日新聞支局、南日本新聞支局など
	タウン雑誌印刷	奄美大島探検図、夢島、ホライズン(休)、まちいろ広告社
	出版	南方新社、海風社、まろうど社、道の島社(廃)、白塔社(廃)
	行政広報	奄美市、瀬戸内町、龍郷町、宇検村、大和村
音声系	有線放送	オリエンタル放送(廃)、親子ラジオ大洋無線(廃)
	コミュニティFM	あまみエフエム、エフエムうけんエフエムせとうち、エフエムたつごう
	県域放送	ラジオの支局はない
映像系	地上波テレビ	NHK 奄美報道室、MBC 支局、県域放送記者
	CATV	奄美テレビ、瀬戸内ケーブルテレビ
	制作プロダクション	コシマプロダクション、中央電化(以前)
音楽系	音楽制作	セントラル楽器、アーマイナープロジェクト JABARA、ニューグランド(廃)
	ライブハウス・音楽スポット	ASHIBI、ぶるーす屋、JUICE、にいみしいそしぎ、サバニなど
ネット系	物販サイト(代表例)	やっちゃば、奄美のめぐみ、奄美いいもの商店街など
	情報サイト(代表例)	シーマプログ、あまみんちゅドットコム かけろまドットコムなど
通信インフラ系	伝送路	奄美通信工業、奄美ブロードバンド

※2008～2015で調査した限りの表である。(廃)は廃業。

※奄美の地域メディアの総覧といった場合には、こうした情報発信・流通に直接関わるメディアに加えて、イベント・メディアの企画主体、そして会場としての会館・ホールなども加味して考える必要がある。メディアイベントの多くは、メディア企業によって営まれるが、行政が主体となって営む文化事業、公民館事業（社会教育事業）や、奄美パークのような公的会館での事業、さらに民間の企業による文化事業なども含まれてくる。（奄美の中で、観客を入れてメディアイベントができる場所と席がどれくらいあるのかは今後の研究課題としたい。）

さらに〈メディアの総過程〉の議論を補足しておけば、メディアは〈文化媒介者〉という定義も可能である。地域のメディアをどのように定義するかにもよるが、本稿でもこれまでの〈地域メディアの総過程〉として対象にしてきたのは、情報メディア事業である。ただ、メディアを「文化を媒介するアクター」として広義にとらえるなら、情報メディアに留まらないよりひろい文化活動の領域が視野にはいつてくる。

文化が誰によって、媒介され、伝承され、さらには創生されていくのか。加藤・寺岡は、これまでの奄美研究のなかで、そうした媒介活動の営みを担う主体を〈文化媒介者（文化メディエーター）〉と名付けてきた。島語りは、島のさまざまな文化活動を通じてなされているからだ。その活動のなかで、紙媒体やメディア媒体としての情報メディアが利用されたり、また新しく生まれることもある。〈文化媒介者〉とは、ある目的をもって奄美についての文化（内容）を発信し、伝える営みとしよう。それは、文化を媒介するという視点からみると、既存の情報メディアの一部だけではなく、島唄の教室だったり、学校での伝承活動であったり、奄美歌謡の教室だったりする。公民館講座も大きな役割を担ってきている（加藤晴明・寺岡伸悟、2013、2014）。

このように〈文化媒介者〉の視点から浮かび上がるのは文化活動の領域である。もっとひろげれば、島では、クラフト（大島紬グッズ）や食（島料理・島野菜）にかかわるショップも多い。こうしたショップは、奄美の素材・文化を付加価値にした記号化されたマーケティングを展開する。これは、奄美という場所に関わるイメージ（場所イメージ）のレベルではあるが、文化という位相での奄美語りでもある。こうした領域もまた、〈文化媒介者〉というひろい意味での地域メディアということができる。情報消費者は、そこからなにがしかの奄美メッセージを感じ取るからである。文化を表現する媒体が文字であるか、モノであるか、味であるかの違いである。そして、モノも味も、しばしばそれを説明するシンボル（言語や写真）とミックスして表現されている。

こうした〈文化媒介者〉を扱うには、別途、〈文化〉のメディア社会学を主題に実証的・理論的研究を展開する必要があるだろう。本稿は、情報メディアを対象に〈地域〉のメディア社会学に焦点を絞ってメディアの俯瞰図を描いていくことにする。

3節 奄美の思い出のメディアスケープ

●活動写真館と芝居小屋

戦前の奄美のメディア環境として人々の記憶に残るものが、映画館（活動写真館）と芝居小屋がある。泉俊義は『奄美物語』（1976）のなかで名瀬の街のそうした情景を思い出として語っている。大正年間、名瀬には日活映画の常設館である八千代館という活動写真館と朝日座（後に朝日館）という芝居小屋があった。その八千代館の2階には、5から6人編制の楽隊がいて、チンタッタ、チンタッタと盛んに音楽を流していたので「ゼンタ」呼ばれていた。他の弁士・旗持ちなどと行列を組んで町中を宣伝のために練り歩いた。後に「島育ち」などの奄美の名曲を世に出す作曲家三原稔も若い時にその楽団にいたという。（泉俊義、1976・指宿良彦、2004）

朝日座は活動写真の他に、沖縄芝居や本土からきた芝居を上演していた。泉の記憶では、1回だけ、地元の芝居（大島芝居）が上演されたこともあるという。女優は、男性が女形として演じたという。戦後の軍政下で奄美には劇団ラッシュが到来しているが、戦前の名瀬にはそうした演劇の土壤はなかったことになる。

娯楽の少なかった島にも、戦後さまざまなメディアが登場した。島でメディアの話をする時に、人々の語りに必ず登場するなつかしい“メディアの思い出”がある。その一部は、現在も継続されているものもあれば、最近まで事業として営まれていたものもある。

今日でもそうだが、奄美を訪れる者はその静かさに魅了される。波の音、

生活の中の歌や踊の太鼓は、まさにエコロジカルなサウンドスケープといえる。他方で、奄美の東京ともいえる名瀬は、メディアによる二次的な音世界が別の音の景観をつくりだしていた。作家の島尾敏雄は、戦後の名瀬の音風景を手厳しく描いたが、その筆力からは名瀬の音の景観がありありと浮かびあがる。

名瀬は喧噪な町だ。それは時としてひとつの混乱だとも思える。騒々しさが町の生活を支配し、島の古いおだやかな習俗も名瀬ではもはや見つけることがむづかしい。まるで長い鎖国の状態が今とつぜん解き放たれたかのように、東京と阪神と鹿児島島のあらゆる流行現象がなだれこんでくる。町に足をふみいれてまず戦慄するのはそのすさまじい音響の氾濫だ。(島尾敏雄 (1977) 『名瀬だより』 49 頁)

島尾が、「島のなかの町の現実」として例示したのが、おがみ山から流される広告放送の拡声器、映画常設館（市内に5箇所あった）の屋根の上の拡声器、宣伝放送車などである。

島尾は、「名瀬の市街地にある二つの高等学校と二つの小学校は、それらの音響が放出されはじめると、まずまともな授業はできなくなる。終日、町の全体を覆うように、流行歌のメロディとそのなげやりな歌詞が流されている状態は、暗い感じのものだ。」と騒音のひどさを嘆いている。島尾が東京で体験した敗戦後の街頭の拡声器放送は、南西の離島群にも押し寄せていると記している。彼は、静かな集落にも発電装置をもって山の上から拡声器による雑音を被せていると憤慨している。

メディア史的にみれば、そうした拡声器放送による広告放送会社が奄美にもあったことがわかり興味深い。日本の戦後の農村がそうだったように、奄美でも集落ごとにそうしたスピーカー放送の施設があったのである（そうした施設は、戦時下の空襲警報用のラッパ型スピーカーの設置から始ったことが多い）。

●オリエンタル放送とミュージックサイレン

戦後、奄美の名瀬市（現奄美市）の市街地を見下ろすおがみ山の上に大きなトランペット型の拡声器をおいて、さまざま伝達（お知らせ・連絡・広告など）放送をしたメディア事業があった。いわばスピーカー放送事業である。放送会社はおがみ山のふもと（現在の市役所脇のNTT社屋の裏側）にあり、入り船・出船の連絡、落とし物、迷子から火事に至るまで様々な生活情報を放送した。時には、深夜に献血を募る放送などがあったという。当時は、血液の保管ができなかったので手術のたびに生の血液が必要となったからである。株主は、笠井（県会議員・奄美大島商工会議所初代会長）、亀井（建設会社社長）、そしてセントラル楽器とならぶ奄美島唄・奄美歌謡のレコードの制作・販売も手がけていた土産物店ニューグランドの山田米三などであった（楠田哲久、2012、36頁）。オリエンタル放送のスピーカーがあったおがみ山の麓には名瀬小学校があり、拡声器の音が騒音であるという苦情から事業は長くは続かなかった。

このオリエンタル放送の後に登場したのが、1958年に名瀬市がおがみ山の上に設置したミュージックサイレンである。これは、それまでの消防所の時報サイレンに代わって、時をつげる音楽を流す装置であった。設置費用は、名瀬市からの出資と寄付でまかなわれたという。朝の6時には「吹け春風」、昼12時に「埴生の宿」、夕方5時「ラルゴ（家路）」、夜10時に「ブラームスの子守歌」が流れた。セントラル楽器がメンテナンスを担当していたが、不安定な電力事情などもあるよく故障したり誤放送することから69年には放送が中止されている。

●親子ラジオの記憶

奄美の放送文化、とりわけ声のメディアの思い出の定番は、ラジオの共同聴取・自主放送の有線放送事業である「親子ラジオ」から流れる地元の情報と唄（民謡や新民謡）の世界である。とりわけ、島唄・新民謡といった、なつかしい奄美らしい音世界の思い出として語られる。

もちろん、今日ではなつかしい音の記憶として語られるが、前述の島尾敏雄は、やはり騒音として生々しく描いている。

名瀬や古仁屋の町には「親子ラジオ」という聴取形式がはやっていて、というより町のラジオのすべてはその親子ラジオだといっている。…（地元の新聞に番組表がのらないので…）いきおい、ラジオはスイッチをいれたままで放置されることになる。…眠ってしまえばスイッチはそのまま、ひと晩中地虫のように低くつぶやき通して、やがて翌朝の最初の放送が開始されると、それは目覚まし時計の役割も演じることになる。そしてその日もまた終日鳴り続けるわけだ。」（島尾敏雄（1977）『名瀬だより』54—55頁）

奄美群島の各地に親子ラジオがあったが、名瀬には最近まで大洋無線という親子ラジオがあった（高橋正晴、2003、坂田謙司、2005）。たぶん島尾の記述に出てくる親子ラジオがこの大洋無線である。契約世帯数は、大島紬の最盛期と重なるように1972年が最大時で約3500で、それ以降は紬産業の衰退と歩調を合わせるかのように加入者も減少し、2004年に1500、最終的には600と減少し続け、2012年に放送を終了した。料金は、加入時3000円、月額1050円である。実に親子二代61年間も事業を継続したことになる。

大洋無線は、戦後全国的にラジオの共同聴取と自主放送（多くの放送施設にはマイクが付いていた）が事業として立ち上げる背景のなかで、名瀬で岡源八郎氏が、1951年10月に軍政府の許可のもとで軍の払い下げ機材を利用して始めた放送事業である。（奄美群島の親子ラジオが全部軍の払い下げ利用ということではなく、私財を投じて本土から機材を購入して立ち上がった知名有線放送のような親子ラジオの例もある。）

会社は、市の繁華街である末広町におかれていた（後に移転）。親子ラ

ジオで流されていた情報は、お知らせ告知情報（住民からの依頼情報や交通関係の情報。特に島では港への入船・出船情報が重要であった）、地域ニュース、市議会中継などである。経営者と社員数名が、取材・原稿書きからアナウンスまでこなしていた。

『名瀬市史』では、現代の文化の章に「親子ラジオの登場」と題した1項目が設けられている。そこでは、1951年10月に開業して一ヶ月後には400戸がラジオを取り付けた盛況ぶりを紹介したあとで、「文化施設に恵まれなかった当時において、この親子ラジオの登場は、市民の文化レベルを高める以上に不可欠の施設として、画期的な企業であった。岡氏をはじめ市内の有識者たちは、将来これを民間放送局へ発展される意図をもっていたようである」と記されてある（本格的な声の自主放送メディアの展開は、2007年5月1日のあまみエフエムの開局まで持ち越されることになる）。

1953年11月26日付南海日日新聞には、市内のラジオ聴取者が432軒、親子ラジオ聴取者が1080軒、両者合わせて100軒のうち20軒がラジオを所有していたとが紹介されている。ただ、沖縄の親子ラジオは、地域の中で芸能に関わるメディア・イベントを展開していたところも多いが、奄美の文化的催しの中に大洋無線の名前が挙がってことないことから、放送だけの事業だったようである。（奄美群島のその他の親子ラジオが、通常の放送以外に、独自の文化イベント事業を展開していたのかは不明である。）



写真：壁に取り付けられた親子ラジオのスピーカー（撮影：加藤晴明、2008.3.8）

大洋無線の放送時間は、午前5時～6時から始まり、終了は午後11時～午前0時であるが、このラジオは、地域のニュース以外は、「四六時中島唄を流す」放送と受け止められていた。最大の聴取者は、名瀬の大島紬の織子さんらで、彼女らは島うた・新民謡などを聴きながら紬を織った。島うたのリズム（多くは2拍子）と単調な機織り作業とが相性がよかったという（大洋無線取材：2004年2月24日）。親子ラジオから流れる音世界は、単なるBGMであったというよりも、楽器店やみやげ店から街頭に流れる島うた同様に、生活に密着して形成される音環境（サウンドスケープ）であったのであり、それゆえ今日で、人々が必ず思い出す懐かしさの景観（メモリースケープ）を形成しているともいえよう。あまみエフエムは、そうした懐かしさを熟知しつつ、朝の告知放送の音質を、わざとノイズを含んだノスタルジックな親子ラジオ風にしてしているのも、そうしたメモリースケープを知っているからであろう。

大洋無線の開業の年は、くしくも徳山商店によって最初の島うたレコードが販売された年でもある（このレコードは、セントラル楽器に販売が引き継がれていく）。島うた文化は、レコードや放送事業・音楽プロデュース事業・メディアイベントといったメディアを媒介とした展開のなかで、“なつかしい”島の固有な文化の記憶として人々の中に沈殿されてきたのである。

興味深い点が2点ある。

1番目は、奄美でテレビ放送が開始されるのは1963年である。しかし、受像器が高かったこともあったであろうが、テレビの台頭でいきなり衰退するのではなく、紬産業の成長にそって1972年までは加入者が増え続けている点である。本土では、すでに1960年代にラジオはテレビによって大打撃を受け、深夜ラジオという若者向け番組（リスナー・セグメンテーション）による復活劇（ラジオルネッサンス）を経験している。テレビの影響で他の親子ラジオが廃業していくなかで、名瀬の場合には、紬産業のながら聴取という受容のニーズがあったことが、他の地域とは異なる音声

放送の持続性を生み出したといえよう。

2 番目は、21 世紀まで続いた大洋無線の後期の時期は、地域のラジオ放送としてのコミュニティ FM が台頭してきていた時期である。奄美でも、親子ラジオ事業はコミュニティ FM にそのまま移行することはなかった。この要因としては、親子ラジオ事業者が、同じ声の放送であるコミュニティ FM には関心がなかったということ、そして両者は収益モデルが違ったということも考えられよう。ケーブルを敷設した加入者契約システムにとって電波による無料放送は事業モデルとして相容れないと考えられたからである。

同様のことは沖縄でもいえる。沖縄はラジオが元気な土地柄であると言われる。その沖縄のラジオ文化の土壌にひとつに親子ラジオがあることは、沖縄のラジオ関係者に取材するとよく出てくる言説である。奄美の例から考えると、親子ラジオとコミュニティ FM は、音の風景としては連続性があっても、両者の間には放送事業としては転換・跳躍があったといえよう。（有線放送から有線テレビへの転換は、長野県などの農村部でしばしばみられる事例である。その場合にも、有線の放送施設として捉えられており、電波系メディアとしてのテレビ・ラジオとは異なる。事業＝収益モデルの違いは、かなり根本的なものといわねばならない。）

●軍政下の文化活動・メディア事業

1946 年の「プライス通告」を経て、「二・二宣言」（連合国最高司令官総司令部（GHQ）が、「若干の外郭地域を政治上、行政上日本から分離することに関する覚え書き」を發表し、「北緯三十度以南の琉球、南西列島」を日本の範囲から除外した宣言）により、奄美は、北部南西諸島という行政領域として米軍統治下に入った。

その軍政下の奄美では、「あかつち運動」と呼ばれる文化運動が盛んだった。今日の奄美にはたくさんの文化活動やその一翼としてのメディア事業があるが、軍政下の文化・メディア運動は、奄美のその後の文化活動・メ

ディア事業が展開する原点だといわれている。

軍政下の奄美の文化活動に関しては、里原昭によって『琉球弧・奄美の戦後精神史——アメリカ軍政下の思想・文化の軌跡』(1994)、『アメリカ軍政下の奄美大島における「文化活動年表」』(1994.10、奄美郷土史専門店である「あまみ庵」発行)がまとめられており、当時の文化活動・メディア事業を垣間見ることができる。

『文化活動年表』の付記のなかで、里原は、収集した軍政下の紙誌の一覧を列挙している。

○ 〈新聞〉

「鹿児島日報特報」(45・9～)

「南海日日新聞」(47・2～) ※鹿児島日報特報から事業継承

「奄美タイムス」(46・10～)

「民衆通信」(49・5～)

奄美の新聞の流れについては次の項で再整理する。

○ 〈雑誌・機関誌〉

「自由」名瀬市自由社(46・12 軍政府許可)

「奄美評論」奄美評論社(47・1 軍政府許可)

「教育大島」奄美大島連合教育会機関誌(47・2 軍政府許可)

「新青年」新四谷青年団機関誌(49・4 軍政府許可) →50・8より、
奄美大島連合青年団機関誌に

「文明」奄美文明社(49・11 軍政府許可)

「ジンミンセンセン」奄美共産党機関誌(非合法出版)

「大島農報」奄美農業技術協会(50・1 創刊)

「校内新聞」大島高等学校自治会機関誌(50・6)

「道標」大島高等学校文芸機関誌(50・12)

「奄美通信」奄美通信会機関誌(51・1 軍政府許可)

「あゆみ」大島高等学校第一部自治会機関誌（51・4 軍政府許可）

「郡政のしおり」奄美群島政府機関紙（51・7 民政府許可）

「こみち」大島実業高等学校文芸部機関誌（52・1）

「婦人会報」名瀬市婦人会機関誌（52・1 民政府許可）

「婦人生活」婦人生活擁護会機関誌（52・1 民政府許可）

○〈文化団体・劇団など〉

「奄美文化協会」（1945・11）

「奄美芸能協会」（46・11）：名瀬町青年団の演芸活動から商業劇団に転換

「文化劇場」こけら落とし（47・1）

劇団「熱風座」結成（47・6）（演出：伊集田 実、第1回公演「やちや坊」）

劇団「演技座」結成（47・8）（演出：碓山隆二郎、第1回公演「恩讐の彼方に」）

「あかつち会」解散（48・7）

「タイガー（群島初のダンスホール）」開店（48・8）

また、アメリカ軍政下（1953年まで）の奄美で、1950年の5月に『大奄美年鑑』（文明社・藤原岡恵社長）が刊行されている。その中で各種企業案内に「言論界」の項目があり、そこには南海日日新聞社外11社の名簿が列挙されている。南海日日新聞社（名瀬市）、奄美タイムス社（名瀬市）、奄美時報社（古仁屋町）、民衆通信社（古仁屋町）、月刊雑誌自由・自由社（名瀬市）、奄美評論社（名瀬市）、月刊雑誌文明・文明社（名瀬市）、月刊雑誌・教育と文化（発行所：奄美大島連合教職員組合）、法律時報社、新生社、中央農業会報。ここまでが言論界11社ということになる。

教育と文化までは、電話番号が記載されている。他には、政府広報、南日本新聞大島総局、朝日新聞名瀬通信部、日本琉球各新聞雑誌取り次ぎ店

などの名簿が載っている。またメディアに関わる項目は、「文化団体平和団体」の項目があり、映画館・劇場・写真館・肖像書師、広告看板店があげられている。

このように、里原の研究や『大奄美年鑑』などによって、軍政下の奄美の文化活動・メディア事業のほぼ全域を知ることができる。ただ、こうした表現活動の一斉の開化は、戦後復興の願いが強かった日本中で沸きあがっていたことであるが、軍政下におかれた奄美では、とりわけ切実さがあったということであろう。

今日でも、奄美の年配者に軍政下の奄美の文化活動の記憶を尋ねると、村田実夫に嚮導された新民謡と伊集田実（脚本・演出家）に代表される演劇の活躍の思い出が必ず語られる。「戦後の奄美のルネサンスと形容される時期の端緒を開き主導したのが、戦後の演劇活動であり、それとの同様の立場から、社会・思想・文学の諸活動が活性化していった。」（里原 b、1994、65 頁）

伊集田実らが劇団「熱風座」を立ち上げたのは、1947年6月、その後毎月のように演目を代えて公演している。第1回公演「野茶坊」（6月）、第2回公演「熱風の街」（7月）、第3回公演「コレヒドール隧道」（8勝つ）、そして第4回が、地元の南海日日新聞の演劇評で「会心の作」と言わしめ、名作と語り継がれている「犬田布騒動記」（9月）である。里原は、「熱風座の「犬田布騒動記」は文化劇場での初演以降、朝日館での長期公演や沖縄公演でも上演し、「恐らく数万人の人が観たと推測されている。」と記している。

このように華々しい演劇活動（当時は、演劇運動という言い方がされていた）の一方、出版された雑誌の数も多い。大部な労作『全記録』（2003）をまとめた間弘志は、1940年代後半から50年代前半にかけての時期を「雑誌の時代」と名付け、「分離期、軍政下の現状を何とかしよう、復興大島を願うエネルギーにあふれた文章が多い」と指摘している（間、2003、175頁）。

新聞・雑誌などのメディアは、文化事業ともかかわっている。軍政下の文化運動に関しては、間の『全記録』第2部「文化運動編」に詳細な記録が整理されている。言論、報道、出版、あかつち会、政党、文学、音楽、演劇、美術、映画、郷土研究、青年団、教育、農民組合・労働組合、婦人団体、官公庁、図書館・博物館・貸本屋・書店、各種催し物・話題と実に19項目に分けて網羅されている。

音楽活動は、他のメディア事業のなかでも複合的・融合的に展開されている。例えば、新聞社以外が主催するものとしては、雑誌の自由社、奄美評論社、青年団、オリエンタル社等が主催して、のど自慢大会や歌大会が行われた。自由社は、49年に、創立2周年記念で「新作新民謡発表会、舞踊の夕」を催している。50年3月号では、新作歌謡入選作を発表している。さらに、軍政下初期の文化活動としては、「あかつち会」がよく知られているが、その活動のひとつがレコード・コンサートであった。

4 節 奄美の新聞メディア

●戦前からの新聞の歴史

第二次世界大戦の戦時下における一県一紙政策もあり、日本では全国紙・県紙以外に、地方都市に根ざした日刊紙は多いとは言えない。とりわけ離島に日刊紙が複数あるといった、島の人々にとって“あたりまえ”のようなこと自体が、研究者以外には意外と知られていないことである。

奄美大島には、数多くの新聞記者がいる。台風の通り道ということもあって、取材仕事があるからともいえる。全国紙・県紙から社員として派遣されている場合もあれば、地元の契約社員、あるいは地元のメディア事業と業務契約という形もある。朝日新聞（社員）、読売新聞、毎日新聞、共同通信、南日本新聞（社員）、西日本新聞が発信拠点をもっている。それに地元日刊紙が2紙。地元紙以外の販売部数ははっきり分からない部分もあ

るが、南日本新聞が1500部、朝日、読売が500部と言われている。

住民のほとんどは、奄美にある2つの日刊紙である南海日日新聞と奄美新聞を購読し、両紙は販売でも競い合っている。発行部数は、それぞれのホームページによれば、南海日日新聞が23,875部（2014年4月15日）、奄美新聞は11,000部（2015年4月30日）とある。つまり南海日日新聞が奄美新聞の倍くらいの発行部数ということになる。島では、群島内全域で強いのが南海日日新聞であると言われている。

2紙は、戦後発刊されているが、奄美の新聞はそれ以前の歴史がある。

〈戦前・戦中の奄美の新聞〉

戦前・戦中の奄美の新聞の歴史は、昇曙夢（1949）『大奄美史』に明治大正時代の言論機関の項目としてまとめられている（昇、2009 復刻版、540-542頁）。『名瀬町史』（1943）やそれをもとに補足して書かれた『名瀬市史』（1998）、間の『全記録』にも大まかな流れが解説されている。

「大島新報」（1907（明治40）※1909年とする地元史もある～1926（大正15年））→譲渡継承され「大島時事新報」（1929（昭和4）まで）→譲渡継承され「大島新聞」（29～）→新聞統合政策により、「大島日報」（合資会社）（1939）に統合→国策により、「鹿児島日報支社」（1944）

南島時報（1910年頃発行、1926年＝大正15廃刊）

大島朝日（1922～38）

大島日日（1934頃～）

奄美新聞（1936～1939）→大島日報に統合

国防新聞（1937頃～）→南西国防新聞（～1942）※軍事基地のあった古仁屋で発行されていた。

『名瀬市史』は、戦前の新聞史を、初期：新聞創業時代、中期：隆盛時代、後期：統制時代に区分してその歴史を詳細に紹介している。とりわけ中期の昭和初期から1939年くらいまでは「大島朝日新聞」「大島新聞」の2新聞の隆盛期であったという。

新聞記者は文化の先端を行き、スマートな蝶ネクタイをしめ、どんな会場へも自由に、しかも、上座に陣取り、みなから重要な職務として受けいれられていた（『名瀬市史』1998、53頁）

また郷土史家の東健一郎も、奄美の郷土研究史を網羅した『近世奄美の郷土研究』（2008）のなかで、明治・大正の新聞・出版についても二箇所では触れている。

明治末期創刊の『大島新聞』、『南島時報』が社会的事業を取り上げ、新聞の使命を自覚して世論を喚起し、中正な道を歩むようになる。武山宮信主宰の月刊郷土誌『奄美大島』が創刊され、凡そ二〇年続く。アナキストの指導者・武田信良氏は同志と共に旬刊誌『奄美タイムス』を発行、奄美大島古仁屋を根拠地に広範囲な活動を展開するが、始期については「大正の始め頃」という証言があるものの、詳細は不明。（東、2008、6頁）

東も指摘するように、武田信良らの動きからは、奄美でも大正デモクラシーの影響が及び、社会主義・労働運動などの影響がみられたことがわかる。武田は、同志とともに1924年に、瀬戸内の蘇刈に社会主義者の大杉栄の追悼碑を立てたことでも知られている。武田ら奄美のアナキストは、1927年（昭和2年）の昭和天皇の奄美行幸（古仁屋にあった奄美大島要塞司令部視察）前に一斉に検挙されている。

〈戦後の奄美の新聞〉

戦後は、「鹿児島日報大島支部」は「鹿児島日報」の本土引き上げに伴い会計独立採算の「鹿児島日報」大島総局となり、「鹿児島日報大島版特

報」(1945)として発刊が続けられた。→本社の改称に伴い「南日本新聞大島版特報」(1946・2)→「南日本新聞大島版」(46・7)→「南海日日新聞」(46・11)と引き継がれて今日に至っている。

戦後「南海日日新聞」の他に、復帰運動の立役者の一人中村安太郎を中心とする人々によって「奄美タイムス」が、46年6月に創刊された(1955頃まで)。最初は、郵便はがきの倍くらい大きさの第三種郵便物として創刊され、51年頃から日刊となっている。その後、「奄美新報」(1953頃創刊)と合併している。その「奄美タイムス」が終刊したのち、2年ほどした1959年7月に「南海日日新聞」の元社員たちが担うかたちで「大島新聞」が創刊された。「大島新聞」は、大島新聞社から奄美新聞社へ社名変更して「奄美新聞」(2008～)として今日に至っている。この他に、徳之島には「南海日日新聞」の草創期に活躍した記者小林正秀が始めた夕刊紙「徳州新聞」(徳州新聞社)があった(現在の医療の徳州会グループが発刊している徳州新聞とは別)。

●奄美には全国紙・県紙も取材体制がある

離島にも日刊紙がある。これは、石垣島、宮古島も同様で、しかも複数の新聞社が競合している。これは意外なことではあるが、朝に全国紙・県紙が届かないという離島の配達事情や海に隔離された日常生活圏を考えればその存在理由が理解できる。島は、島独自の生活に沿った情報を必要としているからである。

ここまでは、島に島だけの新聞があることの理由である。しかし、島にはもうひとつ別の新聞が存在している。それは、島といえども全国紙・県紙への情報発信のルートが存在していることである。島には、多くの新聞記者が在住していて、島の情報を本社に送信している。島のメディアを考える場合には、いわゆる「地域メディア」としてのローカルメディアだけに着目していると、このもうひとつの新聞事業の側面が見落とされることになるので注意が必要だ。

島の新聞は、島の人が読むことを想定した紙面である。これに対して、島には、島外の新聞のために、島外の読者を想定した情報を島外に発信する記者がいる。地域メディアとしての島の日刊紙以外に、地域の中に全国紙や県紙の記者（それもまたひとつの情報アクター＝メディア事業者である）がいることは意外に注目されない。

地域メディアを「情報の地産地消」というフレーズで理解する視点もあるが、それほど単純ではない。新聞の場合には、地元新聞は、地元民にとっては全国紙・県紙の代わりでもある。極論すれば、島の地元紙は、単なる地域メディアでなく、「新聞」というマス・メディア媒体そのものなのである。当然のことながら、通信社や提携する全国紙からの配信を受けることで、全国（国際記事も含めて）記事と地元記事の両方の記事が配置されている。島の新聞の一面には、基本的に地元記事が必ず入るように工夫されているが、地域ニュースだけで紙面が構成されているわけではない。

島にとってというよりも、読者にとつた大事と判断された全国記事は紙面に盛りこまれる。紙面が地域情報だけではないということを考えれば、自産自消型のコンテンツとなっていると言った方が正確かもしれない。（このニュース記事の構成という点では、島の新聞はケーブルテレビとは大きく特性が異なっている。コミュニティFMの場合も、地元新聞社提供の記事紹介コーナーがある。パーソナリティのトークの中で、全国的な事柄が触れられないわけではない。）

情報消費を“まなざし”として把えれば島からのまなざしとともに、島へのまなざしがある。それに答えるのが、島に在住する全国メディア・県域メディアの記者が発する情報である。こうした情報のもつベクトル、メディア事業（情報発信）のベクトルはしばしば忘れられがちである。島をとびかう情報のネットワークのなかで、地域のメディア事業もなりたっているのである。

しかも、そうしたメディア人材は、島の地域メディアの間で職場異動（転職）していることが多い。表5からもわかるように、島外新聞社の契約記

者に、元地元新聞社記者が多い。新聞社の雇用は、たとえ契約であっても高学歴者にとっての貴重な雇用の場となっていることがわかる。また地元新聞社が、高学歴者の人材のプールになっていることがうかがえる。このようにメディアの人材はつながりあっているということは、島には、メディア関係者という人材のネットワークがあるということをも物語っている。

表 5：島の新聞事業者・記者 (2015.11.15 現在)

全国紙・県紙	地元の新聞・支局・記者	スタッフの様態
読売新聞 (西部本社・福岡)	記者 (契約)	元地元紙の記者
朝日新聞 (西部本社・福岡)	支局 (社員)	西部本社から派遣
毎日新聞 (西部本社・福岡)	記者 (契約)	元地元紙の記者
時事通信 (本社・東京)	いない	
共同通信 (本社・東京)	記者 (契約)	元地元紙の記者
西日本新聞 (本社・福岡)	記者 (契約)	元地元紙の記者
南日本新聞 (本社・鹿児島)	総局 (社員：総局長と記者・ 契約記者) 徳之島にも記者 (契約)	正社員と契約社員 計 4 名
	南海日日新聞 (徳之島総局、沖永良部総局、 鹿児島総局、東京支社)	地元出身者 島外出身者
	奄美新聞 (徳之島支局、沖永良部支局、 鹿児島支局、東京支局)	地元出身者 島外出身者

※表は、奄美のマスコミ関係者への取材に基づいている。日日変化もあるので、ある時点での大まかな配置として表化した。

●現在の主要地元紙「南海日日新聞」

こうした経緯をへてきた奄美の新聞メディアであるが、やはり今日でも奄美群島を代表する地元新聞は「南海日日新聞」といえよう。『南海日日新聞五十年史』(1997)には、同社の歴史が詳細に整理されている。

現在 (取材：2014.3.11)、社員総数 68 名 (社員・契約社員)。編集部 31

名（報道部本社 13 名、他支局数名、編集部 15 名）である。支局は、東京・鹿児島・徳之島・沖永良部島にある。記事配信は、共同通信・時事通信から受けているほかに、沖縄タイムス・琉球新報、鹿児島の南日本新聞など記事交流がある。

離島の新聞の特徴は、全国紙や県紙と基本的に競合しないことがある。沖縄本島の「琉球新報」、「沖縄タイムス」だけでなく、石垣島の「八重山日報」・「八重山毎日新聞」、宮古島の「宮古毎日新聞」・「宮古新報」、奄美大島の 2 紙など、限られた人口の島に日刊の新聞があり、しかも圧倒的な購読率を誇っている。奄美の場合、島外の新聞を読むのは島外からの転勤族か官公庁くらいと言われている。

「南海日日新聞」編集長の A 氏（取材時）は、筆者の取材に対して、こうした島の新聞や文化が開花してきたことの起点として軍政下で活発であった言論活動や文化運動を指摘する。文化には、前近代から続く古層のような民俗文化の苗床があるが、他方現代には現代の苗床（起点）があるということであろうか。

『南海日日新聞五十年史』は、当時の状況を、「新聞・雑誌は軍政府の検閲の下、用紙配給ストップの不安と必要量の確保、報道・論評のあり方はざまで、生き残りをかけた駆け引きも強いられた。南海日日新聞、奄美タイムスの両紙はどうか異民族による言論封殺の時代を乗り切った。」と記している（106 頁）。

軍政下の言論、無血復帰運動の輿論喚起のメディア、その栄光として語られる歴史は、奄美の報道メディアの正統性と存在意義を支える物語ともなっている。『南海日日新聞』創意者の村山家國、軍政下の文化運動を理論的に支えたといわれる『大島新報』の中村安太郎、彼らは、まさに復帰運動という奄美史にとっての“最も大きな物語”の主役たちでもあったからである。奄美の言論界が背負った栄光の物語は、その後の奄美ジャーナリズムの“背骨（あるいは姿勢・精神的・倫理的態度とっていかもしれない）”を形成してきたように思われる。編集長の A 氏は、「南海日日

新聞」のアイデンティティについて、「先代（創業者）の意思は、「あかつち」の臭いのする新聞」だと語る。



写真：南海日日新聞社の社屋（撮影：加藤晴明、2014.3.11）

「南海日日新聞」は、もう一つ下位の新聞事業を抱えている。独立採算事業ではなく、社員が兼務する形で発刊している「月刊奄美」である。日刊紙のダイジェスト版であると同時に、本土に散居している奄美出身者の親睦組織である郷友会の活動紹介記事を満載したタブロイド新聞である。これは、各地の郷友会などにおかれている通信員から集まる記事も掲載されている。出身者向けの新聞という性格から、「なつかしさ（奄美にはもう死語になった「なぐるさ」という言葉があった）」を呼び起こすような奄美の芸能活動、とりわけ島唄関係の記事も多い。3000部という部数であるが、購読者は、奄美に深くコミットし続けたい出身者であるという意味では、“濃い”購読者ということになる。実際、この新聞への期待度は高く、到着が遅れるとすぐ問い合わせが来るほどだという。

奄美は人ネットワーク・情報ネットワークにおいて楕円の構図をしている。在島の人々と、島外に出た奄美の人々の関係が切れずにつながっている。「月刊奄美」は、そうした楕円的な人と情報のネットワークを担うメディアである。

南海日日新聞の大きな特色は、報道やイベント事業に加えて、なんといつでも、文化記事の充実や文化事業に力をいれていることであろう。とりわけ「南海文化賞」と「奄美民謡大会（奄美民謡大賞）」は同社を象徴する文化事業であると同時に、奄美の文化史のひとつの重要なシーンを形成してきたといえよう。

〈主なイベント事業（HPより：2015.5.15）

- 1月 南海日日旗争奪少年サッカー大会
南海日日旗争奪6人制バレー選手権大会（男子）
- 2月 南海日日旗争奪6人制バレー選手権大会（女子）
- 3月 新1年生と保護者の集い
南海日日旗争奪ソフトテニス大会
- 5月 南海日日旗争奪中学サッカー大会
奄美民謡大会
- 7月 奄美祭り協賛島唄大会
- 8月 南海日日旗争奪小学生バレーボール大会
- 11月 南海文化賞贈呈式
南海日日旗争奪奄美市地区対抗野球大会
南海さわやかジョギング大会
- 12月 南海日日旗争奪社会人サッカー

『南海日日新聞社五十年史』は、このように軍政下の復帰運動に三人衆の一人であった初代の村山家國自身が文化人であったことが、同社の文化重視の起点となっていることを誇らしく語っている。

焼土と化し祖国と分離された中であって、民俗の誇りを忘れず、各分野の新しい創生を目指すものであった。…初代社長・村山家國

(作詞)、村田実夫(作曲)のコンビによって生み出された数々の新
民謡は、不朽の名作として今なお歌い継がれている。(271頁)

「南海文化賞」は、奄美の各分野において優れた業績を残し、郷土の発展に寄与した人材を顕彰する事業として1972年から始められ、ある意味では奄美の最高栄誉のひとつとさえなっている。出版・文化部門、郷土・民俗部門、産業・経済部門、教育・文化部門、社会福祉部門、行政部門、地方自治部門、医療部門など広い範囲の中から毎年2から3名が顕彰されている。

もうひとつの文化事業の柱が、音楽関係の大会である。かつてはクラシック部門(南海音楽コンクール)もあったが、今日では、鳥唄の大会主催者としての実績が注目される。

いずれにしても「南海日日新聞」は、地域に根ざした良質な新聞として奄美の言論メディアのメインストリームを形成してきたと同時に、奄美のオーセンティック(正統的)な文化実践の主体であり、また推進役でもあったといえよう。

●もうひとつの地元紙「奄美新聞」

奄美で発刊されているもうひとつの新聞が1959年に発刊された「奄美新聞」である。「大島新聞」が、経営難からケーブルテレビの奄美テレビを中心とした企業グループに引き継がれ2008年から「奄美新聞」(奄美新聞社)に改名したのである。

社員は約40名。本社には報道部、制作部、営業部、総務部の4部がある他、支局が鹿児島、徳之島、沖永良部島、東京にある。報道8名、編集7名、支局に12名のスタッフがいる(取材:2014.3.10)。98%が宅配。大島新聞時代の購読者が継続されているという。全国記事は、読売新聞と提携している。「南海日日新聞」のような有名な文化事業はないが、営業局

が中心となりサッカーを始め各種のスポーツ大会を開催している。

〈主なイベント事業（HPより：2015.5.15）〉

- 2月 奄美新聞社杯小学校卒業記念ソフトボール大会
- 2月 奄美新聞社杯バスケットボール大会
- 2月 奄美新聞社旗争奪奄美選手権男女9人制バレーボール大会
- 3月 奄美新聞社杯小学校卒業記念サッカー大会
- 4月 奄美新聞社杯春季職域クラブ対抗テニス大会
- 9月 奄美新聞社杯敬老記念ゲートボール大会
- 10月 奄美新聞社杯夫婦ペアマッチグラウンドゴルフ大会
- 11月 奄美新聞社旗争奪奄美地区対抗9人制男女バレーボール大会
- （未定）奄美新聞社杯敬老ゲートボール南大島大会



写真：奄美新聞社の社屋（撮影：加藤晴明、2014.3.10）

奄美新聞になってからの大きな特徴は、「社説」をもたないことである。記事は、コラム欄は、各記者が自分の責任で自由に書くという方針をとっている。「社説のない新聞は新聞ではない」という従来の考え方に対して、現在は「大上段に構えた社説はいらぬ」という考え方から、地元のニュースを徹底して掘り起こしたり、地元のブログサイトの「しーま」と連携し

たりと、地元密着記事の強化に努めている。こうした戦略には、倍くらいの社員数を抱える地元競合紙との差異化を図るとともに、全国ニュースはテレビ・ネットでというメディア環境の変容を踏まえて選ばれた戦略といえるだろう。

●島の新聞の役割とは：報道だけでない多様な社会的役割

島で次々に新聞が創刊され続けてきたということは、新聞を執筆する「記事を書くリテラシー」をもった人々がいるということである。なぜ、新聞が必要とされ、そしてそれを担う資本と人材がいたのであろうか。奄美の新聞業界に長く身をおいて二つの新聞社で役職も歴任してきたB氏への取材などを通じて浮かび上がってくるのは、以下のような背景にある土壌である（取材：2014.12.18、2015.3.16）。

- ①軍政下での言論運動の隆盛から引き続く言論文化の土壌（人材の土壌でもある）
- ②陣営よりの新聞を欲する政治闘争の土壌（大島郡は全国唯一の一人区として、安徳戦争と言われる激しい選挙戦が展開されたことで知られている。）
- ③郷土史研究などによって醸成されていく人材輩出の土壌
- ④大島紬によって蓄積されていた地元資本力・購買力の土壌
- ⑤大島紬によって支えられた高学歴子弟教育の土壌（Uターンして記者となる土壌）

離島に日刊紙があり、島で生活する人々にとって基本的に新聞とは地元紙のことである。では、「南海日日新聞」に準拠して考えた場合、島の新聞は島でどのような役割を果たしているのだろうか。報道機関としての通常の役割は当然のことだが、「奄美民謡大賞」のような島唄の振興事業に代表されるような〈文化媒介者〉としての役割も小さくない。ある意味では、メディア事業自体が文化変容の当事者そのものでもある。

また、そして、島のメディア・文化活動の広い領域の各所で、「南海日

日新聞」に在籍したことがある人材に出会うことが多い。新聞社は、高学歴者の人材プールとなってきた。このように、新聞を「記事の送り手」、「報道ジャーナリズム」といった狭い次元でだけ捉えるのではなく、新聞社事業を一種の社会的事象として捉え、広い意味での新聞社という事業体（アクター）の役割を考えてみる必要があるだろう。いわば、“新聞社の社会学”とでも呼べる視点で捉えていくことが必要であろう。本稿では、とりあえず奄美に準拠して、4つの役割を指摘しておきたい。

a) 紙面（記事）の提供者としての新聞社（メディアの送り手）

新聞紙面の制作・発行（情報発信）という次元でみた場合にも、紙面には、さまざまな質の記事が掲載される。それは、他の地方紙同様であるが、奄美の新聞場合には、港の出入港に加えて、市況データ・会葬記事（告知やお礼）などが離島らしい情報として掲載されている。記事に関していろいろな分類が可能であろうが、報道的な情報（記事1～記事3）と読み物的な記事（記事4、記事5）とが組み合わせる。

奄美の他のメディアもそうであるが、奄美は鹿児島の一部ではなく、ひとつの独立した経済・社会・文化圏として対外的な境界を形成している。そのため、新聞も、県紙と同様の記事が求められる。そこが、他の地方都市の新聞とのひとつの差異である。奄美のメディアの多くは、「奄美とは何か」（過去・現状・未来）という自己アイデンティティについての問いに直面する。

規模は違って、県紙同様の次元でいやそれ以上の自意識のなかで、奄美という集合的な自己について常に問い続けなければならない。とりわけ、言論機関としての新聞は、その最先頭に位置しているといえよう。「南海日日新聞」をみると、元旦の分厚い特集記事は、毎年のように「奄美とは何か～奄美の過去・現在・未来～」そのものを論じる問いの象徴となっている。

記事1：ニュース報道（全国ニュース）

記事2：地元ニュース・生活情報（いわゆる地だね）

記事3：スポーツ報道（全国記事、地元スポーツ大会）

記事4：解説・社説

記事5：文化記事：典型が正月特集の質の高さ

b) イベント事業主催者としての新聞社（文化事業者としての新聞社）

すでに指摘したように、「南海日日新聞社」「奄美新聞」ともに、数多くのイベント事業を展開している。それをまた記事として掲載することにより、読者が掲載されることによるコミュニケーションが図られている。奄美には島唄・奄美歌謡といった文化の他に、野球・相撲、さらには余興文化など身体に関わる文化が盛んな土地柄でもある。新聞社によって開催される各種スポーツ大会は、そうした奄美のもうひとつの文化をより盛んにしているといえよう。

ただ、なんといっても「奄美民謡大賞」に象徴されるように、奄美の代表的な民俗文化の伝承活動の担い手自身でもあり、そして、その大会のもつステージ化によって島唄文化自身が変容もしていくという意味でも文化の当事者でもある。「地域メディアは地域文化を担う」という意味は、記事内容そのものにあるだけでなく、メディア事業という視点から、さらにはメディア企業の存在が果たすひろい役割から理解されねばならない。

c) 人・ネットワークの結節点としての新聞社

ケーブルテレビやコミュニティFMもそうだが、地域のメディアには、いろいろな人が訪れる。研究者、芸能人、さらに文化人、学生・生徒をはじめ、いろいろな活動を発信したい者は、必ずといっていいほど地元のメディアを訪れる。記者によって取材されるだけでなく、いろいろな人が新聞社を訪問すること自体が記事して掲載される。島を訪れた者、島内外で活動しようとする人々にとっては、新聞社は、訪問を記事として掲載する「広報」という役割とともに、「新聞に掲載された」ということによる信頼

が得られる役割を担ってくれる。このようにメディアは情報を発信したい人々が自ずと集まる機関である。いわば新聞社は、人・ネットワークの“結節点”のような役割を果たしている。地元の情報をいちばん知っている機関であると同時に、情報を求めて、情報を発信しに人々が訪れる結節点だからである。

d) 人材プールとしての新聞社（高学歴の人材育成・輩出機関としての新聞社）

地元の新聞社は、単に日日の報道や事業イベントの主催者として重要な役割を担うというだけではなく、高学歴者の地元Uターン就職の貴重な受け皿であるという側面がある。NHK 特派員として有名であった『あの日あの時』(1996)の著者である実島隆三、奄美を記録し続けて『奄美二十世紀の記録』(2000)や『奄美静寂と怒濤の島』(2002)で知られる写真家の越間誠をはじめ奄美で活躍する文化人には「南海日日新聞社」に在籍したことがある者が多い。つまり、新聞社は結果として奄美の文化・知識人の人材育成の苗床（インキュベーター）や人材プールの役割を果たしてきたといえる。こうした高学歴者の人材プールとい視点から地域産業と雇用を考える視点も必要であろう。（かつては地元の学校教員・郵便局職員も、そうした地方の文化・知識人の受け皿となってきた。）

5 節 奄美の雑誌メディア

●過去の雑誌：『サンデー奄美』・『奄美グラフ』その他

最近では奄美単体の観光ガイドブックも増えてきた。最近の離島ブームや南の島ブーム、そして個人旅行やスローライフ志向のなかで、『スローライフ奄美』(2006)、『奄美大島に行きたい』(2013)、『地球の歩き方 JAPAN 奄美大島』(2015)など次々に出版されるようになってきた。

ただ、奄美に旅行する者が手にするもっともポピュラーな観光雑誌は、『るるぶ屋久島・奄美・種子島』と『まっぷる屋久島・奄美大島・種子島』である。世界自然遺産登録後の観光客ブームが持続し、人口減少が止った希有の事例が屋久島である。その人気のある屋久島とセットで、後半のページを埋めているのが奄美紹介のページである。種子島・屋久島を中心とした大隅諸島と奄美群島を一括した薩南諸島というくりである。

このように最近増えてきているとはいえ、少し前までは、島外で手にする奄美の紙媒体の情報は限られていた。過去にさかのぼってみると、奄美にもグラビア誌のような大ききさで、写真・記事・広告で構成された郷土雑誌があった。これらは、観光客相手というよりも、島内・出身者を対象にした地元経済誌のような側面ももっていた。

『サンデー奄美』（森村元栄四郎・サンデー奄美新聞社（東京））は、復帰10周年の1963年に創刊され、1995年まで続いている。295号まで収録した上下の縮刷版まで出されている。1972年（復帰20周年の前年）には浅野要が、月刊郷土誌『奄美の島々』を発刊した。『奄美の島々』は、途中1984年（復帰30周年の次の年）には、1981年に創刊された『奄美観光グラフ』（牧宏育編集発行）と合同誌となり、1990年の106号まで続いられている。1984年の85号が600円の値段である。

同様に、グラビア誌的な『奄美グラフ』（宏州一男編集発行）が1983年に発刊され1998年に53号、2000年には特集版として55号『奄美本島ガイドブック』が出されている。55号が最後であるが、84年の17号段階で1冊800円である。また徳之島では元公務員で『徳之島郷土研究会報』も出していた水野修が1991年に『潮風』（潮風出版）を発刊し、93まで7号を発刊している。『奄美の島々』と『南の風』は比較的執筆記事も多く雑誌風、これに対して『サンデー奄美』や『奄美グラフ』はグラビア雑誌風である。こうした雑誌は、新聞社出身のジャーナリストではない個人によって発刊され、定期購読料ではなく広告を元に運営された。

最近の奄美では、いくつものタウン誌や観光フリーペーパーが空港・レ

ンター・飲食店などの各所におかれている。ジャンルのには、大きくは、外向け、つまり観光ガイド的なフリーペーパーや有料ペーパーと、いわゆる島内向けのタウン誌がある。奄美にはこれまでもたくさんのタウン誌や観光冊子がつくられてきた。しかし他の地域のフリーペーパーがそうであるように、それを事業として持続させるのは容易ではない。

2010年から2015年の間でいえば、奄美大島の中で目にする事の多い冊子は、『奄美探検図』『夢島』『machiiro』『ホライゾン』の4媒体である。他にも印刷会社発行のフリー冊子などもあるが、主要な媒体ということでこの4媒体を焦点をあててみよう。(過去には、出版の項目で紹介する海風社が出版していた『月刊南島』のような雑誌もあるが、この説ではグラフィ誌や観光用のタウン誌を取り扱う。)



写真：奄美でもこれまで数々のタウン誌が発行された。(撮影：加藤晴明、2010.9.14)

●草分け的なフリーペーパー『奄美探検図』

1988年設立の奄美の草分け的な観光ガイド企業である観光ネットワーク奄美が発行しているフリーペーパーである。ウェブサイトの「あまみ便り」も運営している。現在の奄美ではもっとも老舗的なフリーペーパーで

あり、2015年春段階で34号(年2冊発行)を発行している。『奄美探検図』の上下に「シマッチュ(島の人)とつながるパスポート」「島を楽しむ、シマ暮らしの情報誌」というサブコピーが掲げられている。観光用のフリーペーパーであるが、奄美の観光ガイドブックと比べていい情報量を盛りこむとともに、レイアウトや記事の配置のなかに、「選び抜いた情報を通じて奄美を紹介する」という強い意志やメッセージ性が感じられるこだわりのあるフリーペーパーである。

島ラジオの周波数一覧、バス、フェリー、レジャー、植物の持ち出し、猫害、公共施設連絡先、商店街の位置情報、タクシー、さらに、奄美らしい食材・料理まで、観光ガイドでもあり、奄美初心者にとっての生活と文化のガイドでもある。「シマ暮らし」というサブコピーが語るように、Iターンをはじめとする奄美暮らしの第一歩にかなり役立つ内容となっている。そうし内容の配置自体に“奄美を語る”のだという強いメッセージ性が溢れているといえる。

スタッフ3名の事業であるが、設立時より観光ガイドを務めるC氏が制作を担当している。C氏は、ホームページの自己紹介で次のようなプロフィールを公開している。「奄美奄美市笠利町生まれ、名瀬育ち。高校卒業後シマを離れるが12年後にシマに帰り、シマを学び始める。元々本好きだが、ガイド資料として奄美関連の書籍を集め、奄美に関することなら自然だけでなく歴史・民俗などなど、”広く浅く”から”広く深く”へと日々勉強中」(HP:2015.6.1)。

現在、奄美で「島の文化を担う人々」「島を語る人々」「島をプレゼンする人々」(本書ではひろく**文化媒介者**)として捉えている)として活躍する多くの人がそうであるように、C氏もまたUターン以降に島のことを学び始め、語りの実践家として自身を構築してきている。鳥唄をはじめ奄美の文化・自然に造詣が深い奄美語り人の発行するフリーペーパー『奄美探検図』は、奄美へのこだわりが詰め込まれた個性的な冊子といえる(取材:2008.3.3)。

●フリーペーパー『夢島』

奄美の島内でいちばん見かけることの多いフリーペーパーが2007年に創刊され年に1回発行されている『夢島』である。写真を中心にした物販・飲食カタログ情報を満載した60ページを超える分量を誇る充実したフリーペーパーである。ヘッドコピーに「奄美の優良店を徹底ガイド」とあるように、店の写真と80文字程度の店の特徴を紹介するコメント記事、そしてクーポンで構成されている。

ページは、奄美が堪能できるように詳細なジャンルに分けられた構成となっている。観光ガイド（南部・名瀬・北部）、自然体験、文化体験、アマミブルー、北部ダイビング、海のサファリツアー、奄美の島みやげ特集、本場奄美大島紬特集、雑貨特集、アマミアンオリジナルグッズ、奄美的Tシャツ図鑑、オーシャンビュー特集、ダイニング特集、厳選素材特集、奄美地鶏特集、郷土料理特集、リラクゼーション・ビューティ、地図。こうしたジャンル別にインデックスが付き、奄美の観光資源を網羅しているといっている構成であり、ジャンルの分け方に編集者の個性があるともいえる。『夢島』は、かつては、名瀬の歓楽街である屋仁川通りを対象にした夜のお店のガイドブック『夢島Night』も数冊出していた。

冊子を発行するD氏は、冊子のコンセプトを、①全国的観光雑誌である『るるぶ』に勝つ雑誌であること、②中途半端でない冊子と位置づけている。いわば地域に密着しつつ、しかし地縁に依存しないで宣伝効果という“利”に依拠した冊子づくりである（取材：2010.9.14）。

興味深いのは、D氏が大都市での広告業界や沖縄の離島での同様のタウン誌発行を経験し、そのビジネスモデルを奄美に適用して一定の成果をあげていることである。『夢島』は、地元出身者による事業ではないが、その事業を通じて、直接取材し、自ら写真を撮り、集金することで、奄美の店舗情報を網羅し、人ネットワークの網をひろげてきている。奄美の店舗情報を網羅している冊子であるから、この編集部がいちばん奄美の商業の現場を知っているともいえる。D氏は、出身者としての地元つながりでは

なく、“広告料に見合った効果”を強調し、「いろいろな広告を出したけど、…客が来たよ。効果あったよ。」と呼び止められた時が嬉しい語る。D氏は、地元マス・メディアの取材に応じることもなく、“奄美のために”というような大上段なフレーズで直接話法的に奄美へのミッション（社会貢献）を語るわけではないが、広告効果という実利を起点にして、奄美の強力な情報発信メディア事業を展開している。

『夢島』の場合には、観光冊子をつくるノウハウという外部資源を、島内に移入することで成立している地域メディア事業といえる。

●フリーペーパー『まち色マガジン』

観光冊子が外向けの情報発信媒体であるとすれば、『まち色マガジン』は、奄美市名瀬（旧名瀬市）の典型的なタウン誌である。冊子のコピーにも「なぜまちと奄美の情報誌」「なぜまちから奄美の情報を発信」と掲げられている。年4回と特別号、あわせて5冊発行している。もともとは中心市街地活性化のプロジェクト（なぜまちカンモレプロジェクト）の情報発信部会の活動として取り組まれたことからスタートしている（2007年）。雑誌作りに関しては未経験の商店街・飲食街の若手メンバーによって、継続的な雑誌の発行というメディア事業が選択されたのである。

補助金終了後も、雑誌発行の継続のために運営母体としてNPO（「特定非営利法人まち色」）が結成された（2008年）。まちづくりNPOがあつてその事業のひとつとしてタウン誌を発行するのではなく、タウン誌発行があつてのNPO（「まち色」）である。名瀬のタウン誌ではあるが、10000部を全島100箇所に配布している。一般にタウン誌の継続は難しいが、『まち色マガジン』が持続してきたのは、中心となるE氏の奮闘に加えて、NPOの企業会員の機関誌という基盤と、冊子以外での収入（広告・写真撮影・企画デザインなど）を確保することで収益事業として継続してきている。いわば「まち色」編集部は、小さな広告企画企業でもある（取材：2011.3.9、2015.5.24）。

冊子の特性は、都市的な街の文化を前面に出していることである。25歳～45歳くらいのサイフの紐をあずかっている女性を対象に、またUターン、Iターンの人に伝播力のある「奄美でも都会的なものを享受できる」ような冊子づくりを目指してきた。都市からのIターンの人にも通用するおしゃれなタウン誌。そうした狙いの冊子である。ターゲットも、アラサー世代の若い女性向けとなっている。実際にIターンをして、一時期編集にもかかわっていた女性は、初めてこの冊子を手にした時に、「あっ、島にはこんな面があるんだ」と驚いたという。

タウン誌としての店舗紹介の他に、「奄美グルメ部」「シマノイエ」「シマライフ」「美ランナースタイル」「女が輝く、男も輝く」「女子会のススメ」などのトレンドな特集に加えて、地元の奄美研究者による「奄美探訪(シリーズ)」「里の味めぐり」などの連載記事も掲載されている。

市街地活性化のための商店会をベースにした『まち色マガジン』であるが、観光向け冊子の側面ももっている。自然ばかりではない奄美の魅力を発信したい、街中観光にもつなげたい、そうした観光向け冊子の面ももっている。

こうしたタウン誌も、時間の経過のなかで、発端となった中心市街地の低迷という社会変容のなかで、雑誌自体の性格にも変化が生じてきている。それは、冊子自体の魅力もあって、商店会の会員の減少を会員商店街以外の加入が埋めることで、60余の会員数が維持されていることである。現在、名瀬の中心市街地は、再開発に伴う空洞化が進み、商店数の減少に見舞われている。そうした店舗数・商店会の会員数の減少の一方で、最近ではエリア外の会員も入ってきている。「まち色マガジン」は、名瀬中心地商店街だけのタウン誌から「島のタウン誌」へと変化してきているともいえる。また冊子のウェブサイトへは島外からのアクセス（島内25%、島外75%）も増加している。つまり、島内向けのタウン誌といえども、観光雑誌的な機能も果たすようになってきている。あるいは、自然だけではなく、奄美そのものへの関心の高まりと個人旅行の増加という流れのな

かで、島の中の街も観光の対象となってきたということでもあろう。実際、空港のレンタカー店にもおかれ、観光客が手にするタウン誌でもある。最近の号では、裏表紙に鯨の写真を掲載することで、ホエールウォッシングをイメージさせるような観光冊子風イメージを一層強くしている。

●奄美の情熱情報誌『ホライゾン』

『夢島』が宣伝効果に準拠した奄美の観光冊子であるとすれば、「奄美の情熱情報誌」をコピーとして掲げる『ホライゾン』はある意味では奄美を公式に表現する観光冊子媒体であった。編集を担当してきたのがホライゾン編集室である。編集室は、奄美観光連盟の公式観光冊子ともいえる『奄美群島観光ガイドブック』（1999,2001,2009）なども編集や発行をしている。ホライゾン編集室は、もともと東京の大手の出版社に勤務したキャリアをもつプロの編集者でもある浜田百合子が写真家でもある浜田太とともに運営してきた事業である（浜田太は、奄美の黒ウサギの写真で著名な動物写真家である）。夫妻は、大島内の町勢要覧や市勢要覧や、イベント情報誌『奄美ネシア』（7年間）などを手がけながら、群島の写真・特集の情報誌を発行できる体制を整えてきた。『奄美ネシア』も、イベント情報誌からはじまり、特集を組み込み、そして文化を特集できる冊子へと発展してきたが、そのコンセプトを更に発展されて企画発刊されてきた冊子が『ホライゾン』であった（取材：2009.8.19、2015.11.14）。

『奄美ネシア』につづく観光冊子『ホライゾン』は、1995年6月に第1号が出され、年2回発行され20年間で40号を重ねてきたが2014年末に終刊している。インターネット時代となり、奄美からの情報発信の形も多様化するなかで、役割を終えたと考えての終刊であったという。

『ホライゾン』は、紙面内容の文化的質の高さからも、奄美群島の観光情報を代表する紙媒体という位置を担ってきた冊子といってもよい。誌面の特徴は、見える素材としての自然だけではなく、“文化や人間”（つまり“自然と文化とそこに生きる情熱的な人々”）を特集してきたところに特徴

がある冊子である。文化や人間に焦点をあてたそのすぐれた特集は、島出身の写真家と島外出身の夫人との二人三脚が残した現代奄美の貴重な記録でもある。

浜田は、『ホライズン』の教科書として、JTA 機内誌『コーラルウェイ』や雑誌『サライ』のサライインタビューをイメージしたという。ビジュアル誌をめざしていたこともあり、冊子の特徴として美しい写真（そのため紙質も高画質である）が多用されている。

「研究書はともかく、外から来た人間が奄美を知るための入門書がなかったので、勉強して、奄美を知らないけど、知りたい人に伝える」そうした雑誌をつくりたかったという。文化のなかでも、絵で見るものは紙面に入れられるが、音や踊りを伝える紙面づくりは難しかったという。

取材にもとづく各号の特集は、奄美の文化の紹介でもあり、苦労して集めた写真や記録的な価値の記事が盛りだくさんの構成となっている。執筆者も、第1号から、著名な民俗写真家である芳賀日出男をはじめ島の知識人が記事を並べ、当初から文化的な価値の高い冊子であった。特集号からもわかるように、内容は自然から文化・人・歴史まで多岐にわたっている。

『ホライズン』の特集一覧（特集や表紙に列挙されたコピーの数々）

- VOL.1：古代の奄美が語りはじめた
- VOL.2：海中の異星人を追って
- VOL.3：島を詩う、謳う、唄う
- VOL.4：ユンヌ。とーとうがなし／田中一村が愛した奄美の植物たち
- VOL.5：アンダーグランド・パラダイスへ／奄美新民謡ラブソディ
- VOL.6：ヤポネシアのざわめき／奄美群島バードウォッチング入門
- VOL.7：アウトドア特集 奄美マングローブ大紀行
- VOL.8：奄美群島郷土芸能大全 島々の祭りに酔う。
- VOL.9：森と海の不思議な生物たち

- VOL.10：奄美・シマ唄の世界へ
- VOL.11：サーファーたちの海・奄美
- VOL.12：奄美古代王国はあったか／黒糖焼酎ものがたり
- VOL.13：アマミアン・サンセットに染まる／ハブ博士、奄美の森をゆく
- VOL.14：加計呂麻島・ゆめ案内／森の守り神 巨樹は語る
- VOL.15：奄美の天と地を染め織る／奄美魂・熱いところが走る島
- VOL.16：島々を描いた文学・歌遊びの魅力 三味線は語る／奄美のフルーツ大特集
- VOL.17：ネリヤカナヤの見える海／蘇れ、思い出のあの日、この歌
- VOL.18：奄美を彩る 四季の花々／写真が語る素顔の奄美 駆け抜けた熱い風たち
- VOL.19：郷土料理をみしょれ／奄美・島々の天地創造
- VOL.20：蝶の舞う島々／ノロの祈り／特産品の歴史を語る
- VOL.21：沖永良部の旅
- VOL.22：奄美のおいしい魚たち／ごまの威力／歌うことは生きること
／喜界島の旅
- VOL.23：奄美の森に生きる／与論島の旅
- VOL.24：メッセージ of 島ンチュ／徳之島の旅
- VOL.25：奄美の水中世界へ／お取り寄せ情報／奄美大島〈北部〉の旅
- VOL.26：奄美のクロマグロ、空を飛ぶ／特攻花の咲く島で／奄美大島
〈南部〉の旅
- VOL.27：画家・田中一村と奄美／奄美芋いも賛歌／芭蕉布を創る
- VOL.28：宇宙を感じる島・奄美／島を遊ぼう
- VOL.29：太陽と月に抱かれる島・奄美／黒糖焼酎・蔵巡り
- VOL.30：奄美諸島・歴史入門
- VOL.31：I ターン・旅ンチュ特集／奄美の貝ものがたり
- VOL.32：ウミガメの島々／聖なる歌の島・奄美
- VOL.33：島々の妖怪大全／奄美群島のパワースポット

VOL.34：聖なる奄美の踊り／黒糖焼酎のおいしい飲み方

VOL.35：ミステリアスな鳥たち／相撲の奄美文化論

VOL.36：奄美の海・再発見／奄美に平家落人は来たか！？

VOL.37：奄美のカトリック教会を訪ねて／船で行く奄美新発見と出会い旅

VOL.38：米軍政下の奄美／奄美ゼミの魅力

VOL.39：奄美の行事食／戦争遺跡は何を語るのか

VOL.40：中新世の方舟にのって／奄美の民話世界の民話／さよならホライゾン

ホライゾン編集室は単独事業というよりも、ホームページの入り口が「エアポート TV ネットワークジャパン」（空港におけるモニター TV による映像広告媒体事業）となっており、メニューには浜田太写真事務所なども並ぶ。また黒ウサギを始めとするぬいぐるみの販売なども手がけており、奄美の情報を発信する広告企画のファミリー企業である。ちなみに、2009年版の『奄美群島観光ガイドブック』の発行も「エアポート TV ネットワークジャパン／ホライゾン編集室」となっている。このように『ホライゾン』は、地元出身の写真家男性と東京の出版社で編集の経験のある女性がパートナーとして協働したかたちで成立したメディア事業だったといえる。

繰り返すが、終刊になったとはいえ20年間にわたり奄美の自然・文化・人をビジュアル誌という形で表現してきた『ホライゾン』という雑誌があったことは、奄美の記録としても意義深い。紀行された記事の数々は、最初の狙いどおり奄美を深く学ぼうとする者にとっての優れた入門書であるとともに、研究書とは違った意味で一次的な史料・記録として今後も参照に足る価値をもっているからである。とりわけ特集コピー・記事、連載寄稿や写真の数々は、奄美のメディア表象（奄美イメージ）を研究するうえでは貴重な資料となろう。その点では、『ホライゾン』は、単なる情報誌やフリーペーパーとは異なる、ビジュアルでナラティブな島語りの雑誌で

あった。特集取材記事や連載記事として掲載されてきた写真や記事は、限られたスペースのなかに凝縮された現代奄美の証言といえよう。



写真：『ホライゾン』VOL.40 終刊号の表紙（提供：ホライゾン編集室）

6 節 奄美の出版メディア

●永井竜一と白塔社（赤羽王郎）

島にも出版社がある。沖縄にはボーダーインク、石垣には南山社というよく知られている出版社があるが、奄美群島内には出版社らしい出版社はない。地元の有名書店である楠田書店や南海日日新聞などが出版を手がけることもあるが、いわゆる編集部を抱えた出版社とは言えない。しかし島外には、奄美の本を集中的に出版する出版社が、過去にもそして現在も活発な出版活動をしている。

島に限らず地方における出版事業は、多くの場合郷土研究と結びついた郷土本であることが多い。明治以降の近世奄美の郷土研究と刊行物の歴史に関しては、郷土史家である東健一郎の詳細な研究『近代奄美の郷土研究』

(2008)がある。東の研究によれば、明治に入り、鹿児島県勸業課の役人であった白野夏雲、大島支庁長の新能忠三、笹森儀助らによって調査報告書などの形で郷土資料が整備されている。

そうした歴史的な資料を出版という形、つまりメディア事業として意識的に公刊した人物が、奄美の出版事業の起点に位置する永井竜一（龍一の表記もある）である。永井は、郷土資料の収集と頒布によって郷土研究に貢献した人物である。『大島喜界島代官記』（1932）に始まり、『南島雑話』（正編・補遺纂）（1933、昭和8年）、白野夏雲の『七島問答』（1933）、『南島方面絵巻』（1934）などの貴重本をガリ版刷り（謄写刷）で次々と複写・出版している。永井は、後に北京の国立北京新民学院大学の教授となるが、1932年（昭和7年）から1938年（昭和13年）までの7年間に精力的に出版活動を展開した。

永井竜一の郷土研究を詳細に研究した東健一郎は、その業績を3点にまとめている。

- ①代官記等の編纂
- ②都成植義著『奄美史談話』、同『南島語及文学』の発行
- ③『南島雑話』の編纂

永井は名瀬で生まれ育ち、明治・大正・昭和の変動期に、奄美教育界の現場で、そして視学と言う役職で教育界の重鎮として活躍した。その永井が精力的な歴史・民俗研究の資料収集と出版活動をしたのは、鹿児島での鶴嶺高等女学校に赴任した1931（昭和6年）以降である。この鶴嶺高等女学校に赴任した時期、とりわけ1932年（昭和7年）と翌年に集中的に郷土史料の編纂を行っている。

これらの本は、白塔社から発行されている。白塔社は、信州白樺派の教育者の中の異才といわれた赤羽王郎が1932年（昭和7年）に鹿児島市内で興した事業である。信州生まれの赤羽は、偶然ともいえる縁で奄美を訪問し、そして職を求めるなかで視学であった永井と出会う。偶然から始まった出会いであったが、この放浪の教師はその後何度か教育者として奄美の

教壇に立つなど奄美と深い関わりをもった。赤羽は、永井の鹿児島転勤を追うように奄美から鹿児島に移り、やがて鹿児島の女性と結婚し、教員をやる一方で出版事業を手がけている。



写真：永井竜一・白塔社（赤羽王郎）が出版した『南島雑話』の表紙

赤羽は、出版事業が軌道にのるや1933年8月には故郷の信州にもどり松本白塔社を設立している。つまり赤羽は、鹿児島在住の1932年の春から1933夏までの短い期間、「帝展（現、日展）工芸部門の入選疑いなし」と評された謄写技術をもとに謄写印刷の白塔社をたちあげ、『南島雑話』をはじめとする数冊の復刻本と『子供新聞』を発行したことになる。

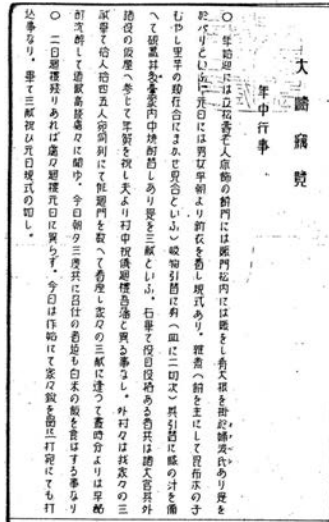
こうした経緯は、永井の側からの物語は、東健一郎の研究によって、そして赤羽の側からの物語は、今井信雄の『この道を往く 漂白の教師赤羽王郎』（1988）に詳しく描かれている。

信州白樺派教師たちが教育実践のなかで身体化していた謄写印刷技術＝メディア技術が、不思議な運命の出会いを通じてたまたま鹿児島の地で、奄美郷土資料の出版という形となって結実したのである。永井と赤羽の出会いの物語は、奄美の出版メディア史の興味深いエピソードのひとつとい

えよう。

永井氏は、優れた教育者であると共に謄写技術を得意とする懇意な赤羽氏に『南島雑話』（正編、補遺纂）の発行を依頼して、宿望を果たしたのであった。赤羽氏の係わる奄美関係の発行文献は大庭秀景著『奄美大島植物誌』を加えて三冊となる。（東健一郎、2008、59頁）

『南島雑話』は三二九頁、『南島雑話補遺篇』が一七八頁の大冊で、いずれもさし絵がふんだんに挿入された和本である。王郎が松元へ移り住む直前に完成した。…原本の在りかを探し始めた永井竜一は、十四年後に部分的に割愛してある写本を手に入れ、その不備を補って刊行したのが、上記の二書である。（今井信雄、1998、193~194頁）



写真：謄写印刷による『南島雑話』の最初のページ

また、1936年（昭和11年）には鹿児島民俗研究会が発足している。この時期は、昇暁夢や伊波普猷（当時、沖縄県立図書館長）らの南島研究が盛んになる時期でもあった。永井竜一は、昇とはかなり文通もしていたという。また永井は、1934年に専門家21名で行われた十島探検隊による「十島、奄美の調査」の案内役なども務めている。このように、多くの郷土・民俗研究者との交流のなかで、多産な南島資料編纂や著作が生まれたといえる。永井の場合は、自らの研究者であり、かつその執筆を自ら出版するメディア事業者という両面での活躍であったといえよう。

●藤井勇夫と道の島社

復帰後の奄美では、全共闘運動や住民運動の闘士でもあった藤井勇夫（1943~2004）がたちあげた「道の島社」（鹿児島市）が、1980年代前半に何冊もの奄美関係本を出版している。『シマヌジュリ：奄美の食べものと料理法』（南日本出版文化賞）（1980）に始まり、『えらぶの古習俗』（1981）、『ごまめの歯ぎしり』（1981）、『奄美文化の源流を慕って』（1982）、池野無風の『奄美島唄集成』（1983）、『わたしにもゆめがあるんですか』（1985）、南日本新聞社編著『アダンの画帖：田中一村伝』（1986）などである。出版物の発行年をみる限り、道の島社の活動は、1980年（37歳）から1986年（43歳）までの6年間ということになる。

結局、藤井は出版事業に失敗したのち、奄美大島に帰り故郷の笠利で郷土料理店をひらいている。永井竜一が戦前の出版史の起点であるとすれば、藤井勇夫は、ある意味では現代奄美の出版の起点に位置するといえるのかもしれない。社会運動家としての影響力・存在感は、彼をめぐる新聞記事から読みとることができる。奄美で郷土本を扱うことで知られている『あまみ庵』の店主の森本真一郎は、南日本新聞で次のように追悼の文を寄せている。（『南日本新聞』掲載日 2004年6月23日）

奄美大島の生まれ。東京では全共闘運動の中心的存在で、あだ名の「アマミ」は全国版だった。新宿騒乱の指導者として逮捕、投獄される。出獄後は鹿児島市に移り、九州各地の住民運動と連帯して、奄美大島の石油基地や、徳之島の核燃料再処理工場の反対運動を組織し、勝利に導いた。

一方で、アニは「道の島社」を興し、名著を生んだ。『ごまめの歯ざり』『わたしにもゆめがあるんですか』などは、鹿児島県の環境や人権をテーマにした出版活動の先がけとなった。母親つゆさんのシマ料理の本『シマヌジュウリ』は、南日本出版文化賞に輝いた。アニを地域出版の先達と仰ぐ南方新社の向原祥隆さんは、祭壇に報告した。「藤井さんのような人はもう出ないでしょう。『えらぶの古習俗』『奄美の四季と植物考』『奄美島唄集成』『奄美文化の源流を慕って』……アニは地域固有の文化を照らしつけた。『アダンの画帖』（南日本新聞社編）では、無名の田中一村にも光をあてた。

しかし、一村の画集出版などに失敗して倒産。家族は離散し、路頭に迷った。奄美（シマ）に還り、「島じゅうり亭」を開業。過疎ジマの区長として、Iターン者を歓迎し奄美を全国に発信した。

藤井は、朝日新聞のIターン者の住まいを紹介した「『強い自然』の中、自分を再生」の記事の中で、郷土料理店を営む、Iターン者への土地の貸し主として登場している。

18歳で島を出て、東京へ。学生運動に明け暮れ、大学は2年ほどで中退し、東京や鹿児島で反公害闘争などに取り組んだ。「住む場所や家にこだわるのは小市民的だと、断固、拒否していたけど」。鹿児島で出版事業に失敗。借金を抱え、妻子に去られ、生きる気力をな

かした。島に帰ったのが40歳すぎ。金の有無や利害に関係なく接してくれる友人がありがたかった。「土地の持つ力というか、共同体の力というのかなあ、それで生かされていたと感じた。」(2004年1月10日付 朝日新聞朝刊)

この他の出版社では、東京の根元書房(本店)があり、奄美叢書を数冊出している。奄美図書館(鹿児島県立図書館・奄美図書館)の蔵書リストでは、1976年から1985年にかけて15冊ほどの奄美関係、奄美関係者の書籍を発行している。奄美の詩人・郷土研究者である藤井令一も、詩集『女影』を奄美叢書として1982年に出版している。奄美島唄研究の第一人者である小川学夫も、1981年に奄美叢書として『奄美の島唄 その世界と系譜』を出している。この他、奄美内で個人的に本を出す際には、地元の印刷業である広報社などが使われてきたという。

●作井満と海風社

現在の奄美に関する出版の双璧は、なんとといっても100冊近くの南島叢書を刊行し続けている「海風社」(大阪市)と、藤井勇夫を先達と仰ぐ向原詳隆(1957～)が立ち上げた「南方新社」(鹿児島市)である。この2社は、奄美本といえるさまざまな学術書や一般書を次々に出版し続けている。こうした出版社があることが、「奄美学」を標榜するほどの知的な文化の裾野を拡大させ続けているともいえる。奄美を対象にこれだけの出版数を誇る出版社が2社(海風社・南方新社)もあること。それは奄美にとって幸せなことだ。

全共闘世代に属する詩人でもある故作井満が、34歳の時(1981年)に立ち上げたのが海風社である。作井は編集プロダクションを立ち上げた後に、奄美関係の書籍を出版するために海風社を設立したのである。海風社の偉業は、なんとといっても「南島叢書」の刊行である。それ以外にも、『月

刊奄美』も出版していた。作井は思想的信念と意思、そして優れた企画力をもって奄美の書籍を事業として次々に出版した。

南島叢書の最後のページに掲載された「〈南島叢書〉刊行に際して」で、作井は自身の企画意図を次のように表明している。

今日の出版・文化状況に欠落しているものは何か。明治百年の近代に限っていえば、それは、明らかに被抑圧者側からの真実の声を不当に封殺したまま埋もれつけさせたことです。…近代的な日本語文脈がとりのこしてきた闇の領域です。…南島への関心が高まりつつある今日、〈南島叢書〉は、多く読み手と共に、さまざまな問題を根源的な方向に深めていきたいと考えています。中央志向でもなく、無自覚的な郷土礼賛でもなく、日本的な近代文脈が果たしえなかった南島の位置づけを求めて、独自の発想と新鮮な企画で、多くのすぐれた図書を刊行していきます。ご愛読ください。

南島叢書前期 50 巻は、1989 年に沖縄タイムス出版文化賞を受賞している。また国書刊行会から出版されている「沖縄文学全集」も企画・編集は海風社である。

また、1993 年に作井自身が書いたエッセー「南島叢書と私」では、奄美・沖縄・宮古・八重山の 4 領域に関わる南島叢書の「思想的根拠としての南島の出版」について次のように語っている。

日本の文化を考えると、固定的なヒエラルキーにこり固まった発想ではなく地方や下部構造からの、これまで不当におとしこめられていた底辺や辺境からの逆攻にも似たまなざしを取り込まれていくようになれば、ささやかな試みであれ私たちの実験もそれなりに

意味をもったということができます。

作井自身も明らかにしているが、南島叢書の仕掛け人の1人は、当時琉球大学助教授だった関根賢司である。関根との交流を通じて、作井の視野は奄美を超えて南島に広がったといわれている。

南島叢書には、安達征一郎（今村昌平の映画『神々の深き欲望』の原作作家といわれる）『祭りの海・前・後編』、恵原義盛『奄美のケンモン』、小川学夫他『奄美と六調をめぐって』、長田須磨『わが奄美』、武下和平・清真人『唄者武下和平のシマ唄語り』など貴重で優れた著作が並ぶ。

作井は55歳の若さで病に倒れるが、海風社の事業は夫人に引き継がれて奄美に関する書籍の刊行が続いている。

●向原祥隆と南方新社

「南方新社」は、東京で広告・出版関係の仕事に携わっていた向原祥隆が1994年に立ち上げた地方出版社である。創設10周年には自社の10年を振り返る記念書籍『地域と出版』を出版し、出版社たちあげの経緯や初期の出版物について詳細に説明している。もともと大学時代に学生新聞を経験し、さらに東京の広告出版会社勤めを経て、地元鹿児島で創設したのが南方新社である。

社名の「南方新社」は、いまさら日本の中央を見ることはやめよう。むしろずっと太古から海の道を通じて交流のあった南を向いて行こうという意思表示であった。…あえて「新社」と名付けたのは、この地が新しく生まれ変わることに同伴したいという願いからである。（向原祥隆、2004、24-25頁）

向原を貫くのは、開発・原発・農薬汚染に象徴される文明批判であり、地域の自律への志向であり、地域の文化への眼差しという歴史意識である。とりわけ、中央の権力に占領され組み込まれてきた南九州・鹿児島先の先住民である隼人や奄美への深い共感である。また、小学生時代を徳之島で過ごした向原は、奄美へのこだわりも強い。つねに鹿児島・奄美と併記する記述にも彼の思想が伺える。

最初の出版は会社設立2年目の1995年に出した『滅びゆく鹿児島』である。この本には、さまざまな角度から鹿児島・奄美の社会問題を検証した12本の論考が掲載されている。奄美に関しては、「『奄美の島唄』にまつわる思い出」（小川学夫）と「奄美と沖縄、ヤポネシア論の受容の仕方」（前利潔）の2本の論考が寄せられている。

それ以後、『奄美・もっと知りたい』、『聖堂の日の丸』、『それぞれの奄美論・50』『新版シマヌジュリ』など初期の10年にすでに20冊あまりの奄美関係の本を精力的に出版している。南方新社は、その後も次々に奄美関係の本を驚くべきペースで出版し続けているが、そこには向原の出版人としての優れた目利きと営業力に加えて、奄美への深い思いがある。

それ（薩摩・琉球の支配）以前は、誰の支配を受けることのないのどかな風景が思い浮かぶ。望んで日本になったわけではない以上、その以前の日本ではなかった時代に返るという選択肢もあっていい。国を離れることを考えるのは実に愉快なことである。…奄美が日本である必然性はなかったし、ましてや鹿児島県である理由もなかった。ただ力によって無理やり組み込まれたのである。奄美の人口は十三万人。世界には数万人の国だってある。いずれ奄美が独立する日が来てもおかしくはないと、私はまじめに思っている。（60-61頁）

向原は奄美について、「奄美はほんとひとつの国ですよ。国としての意識が高いし、本に対する需要も高い…」と語る（取材：2011.3.11）。それは長く鹿児島と奄美を見続けてきた実感でもあり洞察でもある。興味深いのは、誰が本を執筆し、誰が読むかということだ。彼は、学者だけではない、奄美の普通の人々が本を書く意識の高さと、本に対する需要の高さを指摘する。

学校の教員が10年間研究して本を出す。新聞記者、普通のサラリーマン、おばちゃん、タクシーの運転手が本を出す。そうした奄美関係の本は奄美群島内や奄美出身者・奄美に興味ある人々に売れる（空港売店の書籍コーナーは、奄美本販売の重要な場所ひとつだ）。ひとり当たりの、本の消費量が違うからだ。そうした普通の人々の出版のエネルギーのすごさを指摘する。奄美の人たちの自己語りのパワー、そして自己の歴史・社会・文化への関心の高さ。「奄美の人が本を出し、奄美の人が読む」、そうした地産・地消、さらに自産・自消ともいえる奄美の自己語りの循環がある。南方新社は、その循環を支える出版社でもある。

7節 小括

●再び、地域（奄美）に準拠したメディア社会学の必要性について

奄美は、島語りメディアに満ちた島である。島語りメディアをめぐる理論的考察は、拙稿「自己メディア論から地域の自己メディア論へ ——〈地域と文化〉のメディア社会学：その1——」や「奄美・島語りメディアに満ちた島 ——〈地域と文化〉のメディア社会学：その2——」そして、従来の地域メディア論の問題点を指摘した「地域メディア論を再考する ——〈地域と文化〉のメディア社会学3——」で展開した。

本稿は、その具体的な実証の前編にあたる。放送メディアとネット系メディアの網羅は後編で展開する予定である。その後、奄美に準拠した、

地域のメディア論の理論的再考も試みる必要がある。

奄美に準拠して始めた、「ある特定の地域のメディアを俯瞰する」という研究が目指しているものは、奄美を知ることとともに、これまでの地域メディアをめぐる研究をより拡げていきたいという狙いがあるからである。具体的には、従来の研究に対する以下のような“問い”から始まっている。

- ①地域メディアの新しい種類さがしとその類型図づくりという従来の枠をどう超えるのか？
- ②先進事例の探しとその紹介を記述するという水準をどう超えるのか？
- ③市民メディア論という理想から事例を裁断するという排他性をどう超えるのか？
- ④市民メディア実践のような、主宰者の手のひらの上のメディア（主宰者の自己メディア）づくりに過ぎないような臨界をどう超えるのか？

これまでの地域メディアや市民メディアの研究は、地域メディアという固有メディアを求め、そこにマスコミとは別の理想を付託し、さらにその類型学に終始してきた側面がある。市民メディア論に多い、研究者・運動家の勝手な理想を地域実践にフィルターとして被せ、“ボランティア多用の放送局だからすばらしい”といった美談を情緒的に語るのもあまりに乱暴で単純な議論である。あるモデルの過剰な美化はそれに沿わない実践の排除につながる。そして、理想のケーブルテレビ、理想のコミュニティ FM 探しの旅が続くことになる。

一般に運動論や実践論は、それが理想という査定軸を設定しているかぎり、自己の実践の正当化と他者の排除、そしてそれぞれの競演と批判に陥ってしまう宿命を構造的に背負っている。なぜそのことが自覚され、内省され、危惧されないのだろう。それは、こうした研究や実践が、結局はマス・メディアのフレームから抜け出せないことの反映（過剰なアンチ・マスコミ型モデル追求）でもあるからだ。そのことを指摘する研究も皆無に近い。

研究する側にとって都合よい地域メディアの実例という理想モデルをつ

くりあげてしまったり、研究者が自らに都合のよい実践をするのではないかたちで、「地域のメディアを研究する」ことはいかにして可能なのだろうか。地域メディア論・市民メディア論・市民メディア実践論は、この問いに正面から向かい合ってきたとはいえない。そうした関心と問いが、本稿の起点である。

メディアは地域の中で地域の人々の手で自生する。坂田謙司は、『「声」の有線メディア史』（2005）で、有線放送電話を対象にそうしたメディアが沸き上がる物語を、「自主メディア」という視点から整理してみせた。地域からの内発的な胎動とメディアの生涯のドラマに着目する坂田の研究は、「地域」のメディア社会学の数少ない試みである。

第2節で、地域の〈地域メディアの総過程〉と〈表出の螺旋〉の視点の必要性を提起した。奄美では、これまで、そして今日、いかほどのメディアが生み出され、どのように関係し、奄美の物語を紡いできたのだろうか。言葉として語るだけではなく、その語りをイベントや教室という形に拡張することによって、文化を伝承し・創生してきたのだろうか。

メディアは文化を語り、文化を創る装置でもある。この装置に着目することの最大のメリットは、奄美の文化の本物をめぐる議論（ほんとうの奄美文化とは何か）から距離をおくことができる点にある。メディア研究は、文化を語ってきた容れ物、それを担う人を考える研究でもあるからだ。

メディア（事業）は文化装置である。とりわけ社会背景・文化背景とのかかわりのなかでその社会的な実践を位置づけていく。そうした地域に準拠したメディア研究ができないものだろうか。それが、加藤・寺岡がこれまで提起してきた〈地域と文化〉のメディア社会学の地平であり、そのひとつの試みが、本稿における、奄美のメディアを俯瞰するという作業である。

●4つの“発見”

本稿では、奄美におけるメディアの歴史と印刷メディアを俯瞰してき

た。つづく、放送メディア・ネットメディアの研究を経て総括していくことになるが、とりえず小括として4つの特性を列挙しておこう。それは、文字通りフィールドとの対話のなかから“発見”されてきた特性である。それらはあたりまえの事実に過ぎないのだが、奄美のメディアと対話するなかで改めて具体的な事例を想起しつつ発見してきた特性でもある。分かりやすく、〈かたる〉、〈つながる〉、〈つくる〉、〈ひろがる〉と表現しておこう。

（1）〈かたる：地域のメディアには島語りの位相がある〉

地域のメディアには、語りの位相がある。大きくはマス・メディアからネット媒体も含めて情報メディア（いわゆる媒体）による直接的な島語りと、文化活動による間接的な島語りである。両者は密接に結びついている。メディアという定義を〈文化媒介者〉として広義に拡張してとらえる必要があるというのが、筆者の主張である。本稿は、そのうちの直接的島語りの、さらに歴史・印刷メディアに焦点をあてている。

そして、そうした直接的島語りの場合にも、情報の表現には4つの位相がある。①ストーリー性の次元、②エピソード次元、③表象（シンボル）次元、④素材次元である（加藤晴明、2015a）。

印刷メディアの場合にも、奄美学といった学術書、あるいは奄美紹介本、そして『ホライズン』のような読みごたえのある観光冊子から、『奄美探検図鑑』のようなIターン者にも役立つ地域情報紙、そして『夢島』のような比較的小店紹介に徹したフリーペーパーと内容の位相はさまざまだ。またひとつの本や冊子のなかに、①から④までが複合的に組み込まれていることも多い。写真家の山中順子が企画・編集している『奄美手帳』（トネヤニッポン伝承プロジェクト発行：2009～）のように②から④が濃密に組み入れられた実用書もある。

表 6：島語りの情報位相

語りの位相	内容	記事・番組例
ストーリー次元	奄美学といわれる奄美に関する著作 奄美そのものをテーマにした番組	『奄美学』『奄美大島物語』 放送デイ！学（ラジオ）
エピソード次元	生活のよもやま記事、イベントの報道、お店の取材	新聞の日々の記事 生活ワイド番組の情報 「ナキワキヤ島自慢」（ラジオ） 「やんごでGO」（テレビ）
象徴（シンボル）次元	奄美を象徴するようなシンボル（言葉・図像）	おがみ山・平瀬マンカイ、 ショチョガマ・奄美民謡大賞・屋仁川
素材次元	新聞記事、放送内容のなかに出てくる奄美に関する一般的なデータ	地名、店名、特産物、イベント案内、ニュース、お悔やみのご案内 空の便、海の便

※もちろん、各次元の境界は、かなり流動的である。例えば、素材次元としての地名や店名・商品名も、やはりそれぞれ象徴的な記号なのであり、両者の区分はかなり曖昧で流動的である。

(2) 〈つながる：地域のメディアは多様なベクトルで人と交叉する〉

地域メディアの情報コミュニケーション活動には、情報のベクトルがある。つまり、誰が誰に向かって情報の流れをつくっているのかということである。すでに情報の地産地消という単純モデルだけではない構造があることを指摘した。

地元新聞は、島外の情報と島内の情報の複合でなりたっている。通信社や他の全国紙とも提携し東京・鹿児島に支局もおいている。島内には、全国紙・全国放送の支局や記者もいる。奄美のニュースは、奄美の人々だけに地産地消されるわけではない。テレビ放送ならなおさら、そうした島外にある情報メディアを介して島の人々に島の情報が届けられる。

フリーペーパーも、島内者向け、観光客・島外者向けと分けられない。『まち色マガジン』なども、地元商店街だけのタウン誌だけではない性格も持ち出している。ネットで公開されることで、なおさら雑誌媒体への島

外者からの検索によるアクセスが増えてきている。地域のメディアは、主には地域の人々にとってのメディアでありつつ、地域に関心のある人々に開かれたメディアである。**〈地域全体がひとつのテーマ（関心）である〉**からだ。その意味では地域は、**〈自己コンテクスト性〉**の上に成立する**〈情報的リアリティ〉**である（加藤晴明、2015.a.b）。

地域のメディアは、地域内の人々のコミュニケーションを形成するとともに、地域外の人とのコミュニケーションの上にも成立している。既に指摘したように、奄美の場合には、島外に、出身者の郷土コミュニティが郷友会やインフォーマルなネットワークとして多層に成立している。楕円的なコミュニケーション構造をもっているのである。関心のある人を入れれば、奄美に対する**〈自己コンテクスト性〉**が織りなす**〈奄美コンテクスト〉**＝**〈情報的リアリティ〉**は、多層なコミュニケーション構造をもっている。地域のメディアは、そうした人々の**〈奄美コンテクスト〉**上に成立しているのである。こうした多層性は、地域のメディアを考える際の見落としがちな点でもある。

〈表出の螺旋〉という視点は、そうした多層な情報コミュニケーションの流れを照らし出す戦略概念として提起されている。

（3）〈つくる：地域のメディアは、文化の創生と結びついている〉

この論文では、いわゆる媒体としての情報メディアの俯瞰図に焦点をあてている。しかし、いま奄美でおこっていることは、加藤・寺岡が繰り返し指摘してきたように、民俗文化自体が、メディア的展開を遂げつつあるという現代的な文化変容のすがたである。極論すれば、民俗文化も現代メディア文化のひとつとして継承・創生されつつあるとさえいえる。

放送メディア、音楽メディアもさることながら、活字メディアである新聞メディアも、そこに大きくかかわっている。奄美のシマ唄の伝承・創生は、南海日日新聞社主催の文化事業であるの「奄美民謡大賞」抜きには語れない。もちろん、伝承・創生に力を注いできたアクターは新聞社だけで

はないが、その大会が奄美シマ唄の登竜門となっていることは否めない。^(注3)

スポーツ大会の振興もまた新聞社抜きには語れない。奄美の文化は、シマ唄に象徴されてしまうが、奄美の人々は独特の身体能力の高いさがあるといわれる。腰から下のバネの力を必要とするようなバレエ、野球、体操などが得意だという。歌文化もひとつの身体表現文化であるが、ひろくこうした身体文化という視点から奄美を見ることもできよう。新聞社によるスポーツ大会主催はそうした身体表現の文化に形を与える役割を担っているのである。メディアは直接・間接に文化をつくる。メディアのコンテンツ自体もひとつの文化であるが、文化活動を媒介すること、〈文化媒介者〉となることで他者の表現活動をより形のある姿へと創生していく。それもまたメディアの特性である。

(4) 〈ひろがる：地域のメディアは、事業を拡張する可能性をもっている〉

(3) の〈つくる〉で述べたような身体表現活動にジャンルや制度を与えることは、イベント事業を通じて展開される。それは、送り手と受け手をつなぐ事業の拡張である。拡張というのは、メディアには、コンテンツをつくる事業、つまり紙面をつくる、雑誌をつくる、本をつくる、放送番組をつくる事業に留まらない、人と人をつないでいく側面があるということである。

その代表例がイベント事業であろう。

もちろん、それだけではなく取材を通じた人ネットワークづくりのプロセスのなかでは、新聞や雑誌・書籍そして放送の事業者は、キーパーソンとしてそのネットワークの結節点になっていく。

メディアはコンテンツづくりだけを意味しない。島に住む人、島に来る人、島に関心ある人、そうした人々をつないでいくキーパーソンとしても〈文化媒介者〉なのである。人為的な場ではなく、ある意味で自然に派生するコミュニケーションの渦の結節点となるのもメディアである。新聞を

筆頭に、メディア事業をしているということが、メディア内容を超えたメッセージ性をもつ。メディア事業者（アクター）であること自体のメッセージ性であろう。

※

※

※

本稿はまだ奄美のメディアの俯瞰の半分の図柄である。放送・ネットメディア事業の俯瞰を経て、奄美のメディアの俯瞰図が完成していく。その中間の考察（小括）として、地域のメディアは、情報コンテンツだけではない特性をもっていることを4点指摘した。〈かたる〉〈つながる〉〈つくる〉〈ひろがる〉である。

このような特性を視野にいれば、〈地域メディアの総過程〉や〈表出の螺旋〉も、情報の流れの次元だけでないひろがりをもつともいえる。人と人のつながりや、事業・イベントのつながり、〈地域メディアの総過程〉はそうしたひろがりをもつ概念であり、そうした多層なひろがりのなかで奄美というコンテキスト、つまり表象としてある「あまみ」を輪郭にした奄美アイデンティティが相乗的につくられていく。それは表象としての奄美にリアリティを付与するプロセスでもある。

このようなプロセスに着目するなら、〈表出の螺旋〉とは、加藤・寺岡が当初イメージしていた情報流の複合的な生成といった次元だけではなく、イベントも含めてメディア事業の営み・実践の総体を含む、ひろがりをもつ概念として再定義可能なようにも思われる。そうした視野に立つことで、ケーブルテレビ・コミュニティFMといった業種に準拠した地域メディアの類型学や、理想的モデル探しや規範軸による裁定といった排他的メディア論を超えていくことができるのかもしれない。

奄美の放送・ネットメディアの俯瞰の後に、こうした特性も含めて、再び、地域のメディア社会学の理論フレームの再考を試みたい。

■注

- (1) 文化装置、物語装置など、奄美と物語装置・文化装置については、拙稿「奄美・島語りメディアに満ちた島」（『中京大学現代社会学部紀要』2015 第9巻第1号）で理論的な定義を試みた。
- (2) 本稿では、「地域メディア」の表現よりも、意識的に「地域のメディア」という表現を多用している。ケーブルテレビ、コミュニティFM、地域のネット系メディア（ホームページ、ブログ、SNS）などは、そこに住む人びとにとっては、地域メディアというジャンルではなく、時にはマス・メディアであり、時には、個人メディアでしかない。「地域メディア」、あるいは「コミュニティ・メディア」というカテゴリーは、研究者があるいは報道するマス・メディアが勝手にラベリングしたものにすぎない。

「地域」の定義については詳述しないが、地域は地理的範囲だけではなく、コンテキストがあるところに成立するという視点にたっている。自己による意味付与があれば（〈コンテキスト性〉と名づけた）があれば、地域は成立する。地域はテーマ（関心）＝コンテキストによって成立する。地域に住んでいる人々にとっては、素朴実感的リアリティとして地域は自明のものでありすぎるので、テーマだとは映らない。逆にいえば、テーマ（関心）ある人々にとって「地域＝奄美」というコンテキストは成立する。地域は、そしてそうした関心・テーマの次元で地域の人々にとっても、地元外の人々にとっても成立するのである。ネット社会のそうしたテーマとしての地域を急速に拡大し、実質化してきている。

奄美外の鹿児島や大阪に所在地をおく南方新社や海風社といった出版社も、テーマ（関心）としての地域のうえに成立している地域のメディアである。もちろん、そうした出版社の事業は、奄美関連本だけを出して事業をしているわけではないことも留意しておく必要がある。

島の日刊新聞しかを読まない人びとにとっては、それはローカル新聞ではなく、マス・メディアである。そこには、島の出来事や物語だけではなく、全国的・国際的な出来事も掲載されている。

ケーブルテレビの場合には、放送するのは島で制作された番組であるが、それを見るのは、名瀬・古仁屋といった都市部の加入契約者だけである。島の人びとは、ふだんのテレビは鹿児島県のテレビを視聴し、多くは東京発のキー局番組を視聴しているからだ。新聞とはメディア接触の仕方が異なることになる。見方を変えれば、島の暮らしの中では鹿児島県域の中の、あるいは全国放送を経由して奄美の話題を見ることになる。また、奄美の地域情報は地産地消されているだけではなく、奄美に駐在する取材記者たちによって全国紙・全国テレビ(鹿児島県→九州→全国)にも発信されていく。

他方、ラジオ文化はまた異なる。名瀬に拠点を置く「あまみエフエム」は、島の音楽・独自番組で構成されているが、島内の他の3局のコミュニティFMは、鹿児島の民放ラジオも交えた番組構成となっている。ラジオの電波状況が悪かった島では、そもそもラジオ文化がなかった。最近まで無ラジオ地区で、NHKのエフエム放送が初のラジオ放送として流れた村さえもある。沖永良部島・与論島では、鹿児島の民放ラジオは聴けず、沖縄のラジオが流れている。

ほんの少し、地域のメディアの特性をみただけでも、地域の中でのメディアの生産・消費のありようは複合的である。こう考えると、ケーブルテレビ、コミュニティFMのすばらしい事例の紹介といったような特定の業種に限定された地域メディア研究ではなく、地域のメディア社会の研究が必要になってくるのである。

- (3) 奄美は、うたが盛んな島である。シマ唄があり、戦後歌謡である新民謡があり、そして平成になってからは奄美演歌ともいえる現代的な歌謡曲である奄美歌謡が作られつづけている。シマ唄と新民謡以降の奄美歌謡との違いは、作詞家・作曲家がはっきりしていることであるといわれる。しかし、ワイド節のような昭和になってからつくられた現代的なシマ唄もある。そうした唄はシマ唄の唄者が唄う新しい民謡・ご当地ソングのようなものかもしれない。

加藤・寺岡は、うた文化のメディア的展開として以下を指摘してきた(2012)。

- ・作詞・作曲される(シマ唄の場合にはない)。

- ・レコード・CD化され販売されている。
- ・ステージ・大会・イベントなど、披露する舞台がある。
- ・制度化された教室で伝承されている。

こうした奄美のうた文化のメディア的展開については論考を改める予定である。

※付記

- (1) 本文のなかで、出版などを通じて氏名が公刊されている方は実名を用いた。それ以外、編集者や担当者などは、アルフェベットを用いて使い分けている。
- (2) 以上の研究は、加藤と共同研究者である寺岡伸悟（奈良女子大学）が2008年度から年に2~3回の奄美フィールド調査において実施してきたインタビューなどにもとづいている。
- (3) タウン誌・雑誌などは公刊されたものを参照とした。
- (4) 出版の歴史については、南方新社の向原氏に教えていただくことが多かった。記して感謝としたい。
- (5) 本稿は、科学研究費（基盤研究C）、研究課題名「奄美における文化伝承・創生のメディア媒介的展開とアイデンティティ形成に関する研究」（課題番号25511016）研究代表者：加藤晴明（中京大学）、共同研究者：寺岡伸悟（奈良女子大学）、久万田晋（沖縄県立芸術大学）、研究年：平成25年度~27年度、に基づいた研究成果の一部である。

■参考・参考文献

奄美グラフ（1993）『あまみ今昔よもやま話～奄美グラフ50号発行記念～』奄美グラフ

「奄美学」刊行委員会編（2005）『奄美学 その地平と彼方』南方新社

改訂名瀬市史編纂委員会（1996）『改訂 名瀬市史 2巻 歴史編』名瀬市役所

東健一郎（1989）「永井竜一氏に関する資料」『奄美郷土研究会報』第29号

- 東健一郎 (2008) 『近代奄美の郷土研究～永井竜一氏を中心に～』 まさご印刷
- 間弘志 (2003) 『全記録』 南方新社
- 指宿良彦 (2004) 『大人青年』 セントラル楽器
- 今井信雄 (1988) 『この道を往く 漂白の教師赤羽王郎』 講談社
- 泉俊義 (1976) 『名瀬物語～大正昭和 50 年の歩み』 春苑堂書店
- 神谷裕司 (1997) 『奄美、もっと知りたい』 南方新社
- 加藤清明・寺岡伸悟 (2010) 「メディアとパトリの島・奄美」『中京大学現代社会学部紀要』 第 4 巻第 1 号
- 加藤清明・寺岡伸悟 (2012) 「奄美のうた文化と文化変容論序説～地域メディア論と文化メディア学的視座～」『中京大学現代社会学部紀要』 第 6 巻第 1 号
- 加藤清明・寺岡伸悟 (2013) 「奄美群島・喜界島と文化メディアーター」『中京大学現代社会学部紀要』 第 7 巻第 1 号
- 加藤清明・寺岡伸悟 (2014) 「奄美大島の唄文化と文化メディアーター」『中京大学現代社会学部紀要』 第 7 巻第 2 号
- 加藤清明 (2015a) 「自己メディア論から地域の自己メディア論へ」『中京大学現代社会学部紀要』 第 9 巻第 1 号
- 加藤清明 (2015b) 「奄美・島語りメディアに満ちた島」『中京大学現代社会学部紀要』 第 9 巻第 1 号
- 加藤清明 (2015c) 「地域メディア論を再考する」『中京大学現代社会学部紀要』 第 9 巻第 1 号
- 越間誠 (2000) 『奄美 二十世紀の記録～シマ暮らし、忘れえぬ日々』 南方新社
- 越間誠 (2002) 『奄美静寂と怒濤の島』 南方新社
- 楠田哲久 (2012) 「奄美新民謡における感情表現」鹿児島大学大学院人文社会科学部 研究科修士論文
- 蔵満逸司 (2003) 『奄美まるごと小百科』 南方新社
- 向原詳隆 (2004) 『地域と出版』 南方新社
- 南海日日新聞五十年史編纂委員会 (1997) 『南海日日新聞五十年史』 南海日日新聞社

- 昇曙夢 (1949、復刻版 2009) 『復刻大奄美史』 南方新社
- 坂口徳太郎 (1921) 『奄美大島史』 三州堂書店
- 坂野徹 (2012) 『フィールドワークの戦後史～宮本常一と九学会連合会～』 吉川弘
文館
- 坂田謙司 (2005) 『「声」の有線メディア史』 世界思想社
- 実島隆三 (1996) 『あの日あの時』 南海日日新聞
- 里原昭 a (1994) 『アメリカ軍政下の奄美大島における「文化活動年表」』 あまみ庵
- 里原昭 b (1994) 『琉球弧奄美の戦後精神史』 五月書房
- 島尾敏雄編 (1976) 『奄美の文化 総合的研究』 法政大学出版局
- 島尾敏雄 (1977) 『名瀬だより』 農山漁村文化協会
- 山下欣一・南海日日新聞者編 (1993) 『奄美学の水脈』 海風社